

第Ⅱ部 資本主義は生き延びうるや？

- (1) 創造的破壊の継起
- (2) 独占行動と無駄
- (3) 資本主義システムの変質
- (4) 資本主義システムの死を
招来させるに至る自壊的体内疾患

(1) 創造的破壊の継起

摘要

静態的均衡下に利潤の余地はない。完全競争下にもそうであり、不完全競争又は寡占的競争の下でも大きくはない。高い成長率は均衡的秩序の移動の下では達成されることが出来ない。必要なのは競争についての含蓄の変更である。参入の自由化における価格競争と新製品又は新技術の創出との間にある差、均衡に対し前者は促進的であり、後者は破壊的である。変革衝撃力としては、ドアの幅を拡げるのとビルを爆破するのが比較の例えである。創造的破壊は企業者主導下でなされる革新の奔流であって、変革の累積的で連鎖作用の結果をもたらす、資本主義とは経済進化の推進力を体現した急速な産業変革の形態ということになる。注意すべきは征服された側の問題だけでなく、通常分析では故意に無視されている征服する諸要因についてである。1760年から1940年に至る生活と産業の歴史は質的变化の経過過程であり、新しい生活スタイルの上の新消費財から、また産業組織の新形態の上の新生産方法から来っている。創造的破壊の過程は諸産業の大規模化と独占化に深く関連しており、時代にまたがる過程の中に新概念、競争的独占及び独占的競争がもたれる。目先の適応で運行している企業の大階層があり、それは不断の地震によって揺れさせられ且つその間淘汰的自己破壊がなされていく。負けずに残った者も新製品や新技術の次なる侵入からの脅威に即して戦略を持たなければならない。事業仲間とのカルテルに類似した相互規制があり、そこに押し付けと押しやりとの間の揺らぎがある。・・・その他 (編者)

Ⅱ—(1)—1～15

創造的破壊の継起

1 野心的な密義の中にある資料・・・

私は第Ⅴ章では単に2%ということだけで算定した。・・・

それは1928年のパリティ価格が適用され、そのように1978年に対しては・・・私的可処分所得でのことではあったが、1928年の2.7倍であった。・・・適用価格についての変化のため修正がなされるとして、1978年に向けては1600億適用価格である。・・・更に平均所得は1928年の適用価格で650から約1300までとなる。・・・2%の複利で1ドルの額は1.55・・・

グロスでの全所得は、クズネッツによると、全私的消費と資本投資80億からなり、合して1300億となる。

2%(修正価格)に対応して900億であるとする・・・かくして900億×1.55・・・1928年価格で約1400億である。・・・一人当たり1000、ただしグロスで・・・ただし3%の場合であると、 $1.9 \times 900 = 1710$ 億・・・

重大問題、その後戦争がある歯止めをかけることになった。・・・

1943年価格の場合であると、26年基準価格の103.1(1928年は95)であり、この後者は(95の108%)であるから、1880億となる。・・・

*このノートは大戦後の第Ⅱ版に追加された部分の執筆に際したノートの様である。しかしここにおくことが妥当であると判断した。内容的にわからないところが大きいであるが、シュンペーターの頭の中での計算の様相を窺わせるためおいた。・・・なお数の単位はドル。・・・(編者)

2 社会的—経済的な二重の意味、科学的—資本家的な二重の意味・・・ 企業家と資本家・・・資本家と地主、ペザント・・・略奪品・・・

3 利潤に対する、並びに私的所有に対する真の行論・・・人々は制度と原理について語るのが常であり、人物や策略については決して語らない。

4 生産上の成果(performance)・・・個別企業の戦略といったもの・・・そしてその場合、その企業はすべての彼の仲間達——彼等はずっと多くの利益、乃至は損失をあげている——から監視されなければならない!・・・脅威と損失を抱えた諸計画・・・新商品に由来する損失と脅威・・・

諸利益とその付帯物の源泉・・・奔流の中の航海・・・
諸利益は他のところからも来る。・・・a) 事業情況は作り出される、
b) 個別企業に対しては利益にも損失にもなる。・・・

戦略はどこから入ってくるのか?・・・計画、若い企業の、成功した企業の、協議した企業の、腐食している企業のそれ・・・

第二段には尚、完全競争的ケースの批判が所属する。・・・反復の危険・・・資本主義の本質は第Ⅱ章の2で描かれる。(第Ⅱ章の2は、刊行本では第Ⅱ部の第6・7章)・・・

5 非効率を扱って・・・

価格は社会的費用に比例する。・・・完全競争についてのカーンとラーナー・・・速すぎることと遅すぎること・・・これは制限なのか!? だが省略する・・・ラグナー・・・ここにおいて価格競争の二重の意味・・・ブルジョワジーの時代は、多くの愚かさや価格競争を伴う。・・・蓄積の機能、それは独占に即して諸銀行も入る。・・・このことは大規模生産に直結する。・・・窒素企業といったもの・・・事前のまた事後の利潤の防衛・・・だが制御機構が・・・だが不断に動いている。・・・スティージーの見解に逆らって——独占体における利潤についての・・・独占、大企業——静態的に経営されている謂れはない。・・・これら三企業にみられる運動、広告と販売装置と諸サービスによって保護された和議・・・規制に

由来する消費者の(産出上の)利害・・・制限の機能・・・

6 何故にこれらの諸理論が馬鹿げた結論を導いたのかの理由・・・

これらの理論——以前には充分正しかったであろう——が見逃しているところは、叙している問題が産業変革の過程に埋め込まれているということ、その結果としてこれらの行動様式が把握されるべきであり、且つそうすることで諸理論は意味を取得するということである。それを私はそのように見逃していたが、極めて重要な事実である。・・・

* これらの諸理論とはマーシャル・ウィクゼル理論からマーシャル・クールノー理論及びその発展の上に立つ経済理論・・・刊行本では第6章、納得すべき資本主義・・・A・マーシャル 諸原理、K・ウィクゼル 講義、A・クールノー 諸研究・・・(編者)

形式的な諸特性のことはさておく。・・・それにも拘わらず諸価値が否定される必要はない、更にもって完全競争に関しては。・・・アウトサイダーのセンター・・・目標を変える。・・・モデルを見よ。・・・諸企業が所与の諸環境下でなすであろうところのものは「ステパンの余事」(Nebensache Stephens)——枝葉末節のこと——である。

基礎的な章の終わりのところで、かの諸理論——独占に対してはそれは発展の中から発生し、且つその一形態であるとする——が以前には正しく扱われてきたかについての留意。

評論は、独占について

- a) ほとんど現れていない、とすること
- b) 現れていたとしても独占ではなかったのではないか、とみること
- c) 独占であったとしても、それらの独占は尚、不断にもっと妥当なものになり得るであろう、とすること
- d) 一個の独占設定には長所のあること、その下で偶々のことではあるが一隅に一個の権力設定をなしている、となすこと・・・独占について完全に他の把握が必要、且つ競争についても・・・
- e) 硬直性・・・事前と事後・・・独占的競争は自由競争であり、且つ同時に欠乏の準備である、とすること

しかし、 α) 我々はそれでも変革のため外部から来る人物はないとみており、 β) 我々は価格操作を生産的変革との如何なる関係もなしに、且つ価格を維持せんがためのみに、検討している。・・・

a) 速やかに清算がなされなければならないことである、b) あるいは創出されたものに一昔もの間、縛りつけなければならないということになれば、消費者サイドと生産者サイドにおいて陳腐化が起きる。

・・・トータルコストだがプライムコスト・・・

7 現存している事業体を運転することに付帯する決まりきった操作の部分、そのルーティンが全てではない。これらの事業体が絶え間のない地震によって揺れているような基盤の上に立っているという事実、この事実によってルーティンそのものが支配されているのである。どんな時点をとっても、幾ばくかの人々がもっと良くなるべきどんなことをも考え得なかったという理由から、ともかくも現存在にたどり着いている、といった企業群の大階層があるのは疑い得ない。自分達のビジネスを確立された路線上で運転しており、変化があったとしても消極的適応によって管理されるべき外的事情の変化として受け取られているのである。しかし彼等の行動の観察が資本主義の作動について我々に語ってくれる多くは、ある時点で病院に横たわっている兵士についての観察が軍の動きについて我々に語ってくれるものと同じほどのものなのである。同様にどんな時点を採ったとしても、資本主義的進化の巨大な奔流によってつくられた多くの入り江といったものがあり、その中に多くの企業群が避難してきており、しかも努力もせず当面の諸利益を搾取しているという事態があるのである。これらの入り江が研究する興味を与えないのは確かであるが、その流れの生活はかの奔流の中にあるのである。

どのようにこうしたことが独占を伴って遂行されたのか——アメリカでは過大と言ってよい程にそうなのであるが——、あるいは個別的な問題を越えた論点なのか、誘引されるのか強いられるのか、事前の利潤確保か事後のそれか、調整が遅すぎるのではないか、といった等々の問題が今や論証に至ることになる。更に無駄の問題も単純でないこと、投資が失敗して、ボナンザ時代に不毛の準地代を支払う、ことになることも問題である。

* ボナンザ時代・・・事業の大当たりがごろごろしているような時代、
アメリカ20世紀初頭・・・(編者)

このことを認識することは新しい視点を採用することであり、その視点からして個別事業体の利潤形成と利潤保全の戦略が見極められ、且つまた何であれ与えられた産業の諸々の運命とそれに全体としての産業機構の機能遂行が見極められるのである。だが、もっと正確には、どのようにしてこの新しい視点が我々の論題に乗るかである。・・・競争と独占についての他の概念・・・

8 その奔流の中での生活は一個の限られた持続性をもつ過程であり、どんな企業が与えられたとしても、どんな瞬間においてであれ、それが存在し行う事は、創造的破壊として検討されなければならない。あるいは単純に生活史の典型的なケースは何か次の如くである、即ち、任意の与えられた経済が何であるか、並びに任意の時点でなしているものは何であるか、は、それが実存に至る前に計画と建上げによって部分的には決定されているということ。その計画と結合し、それをチャンスまたは優越性であると信じられると示された一個のアイデアがあったのである。・・・そしてそこで、それがどのように我々の外観を変えることか！・・・

そうは言っても今日の理論家達や官庁エコノミスト達——産業的諸条件について報告書を書いている——の双方は、ほとんど相変わらずに、そうした諸病院とそうした諸々の入り江が全てであった如く説明をつけている。結果として我々は諸産業についての構図をば、その諸産業の構成要素が与えられたもの、等しく所与の方法でもたらされたもの、そして他ならぬ所与の市場で——そこでは準独占的な諸事情がもっともらしく高く適正な諸価格と低い産出量を以て特徴付けられるような事態が確保されている——それぞれのシェアをめぐる抗争が正に演じられているもの、として得ることになるのである。しかしこの分析は資本主義的進化を体現するケースを無視している。分析が適用不能ではないが、全く別な事柄が重要なのである。征服された諸事態が凍結されてあるだけではないのであって、その征服しつつある諸要因こそが新しい光の下に現れるのである。・・・生活史の立場・・・せき立てられて生産する・・・常にそのような計画が・・・企業は二つのことをなす。

9 それは我々に新しい視点を与えることになる。そこから我々は個別企業の行動とその利潤形成、並びに利潤保持の戦略を見究め、何であれ与えられた産業の運命を見究め、全体としての産業機構の機能遂行のあり方を見究めるのであるが、この視点は理論家達や官庁エコノミスト達——産業的諸条件についての報告書を書いている——によっては通常は採用されていない。だが正確には如何にしてこの視点を抱えている問題の上へのせるかである。

我々が何等かの事業体をば建物、機械、原材料のストック、貸借関係とといったもの——それらはともかくも現存するに至ったものであり、且つともかくも管理されるべきものとなっている——の集成とびったり一致するものと考えをやめ、それを実体的に存在しているものとして、すなわち今あるものを規定している過去の生きている存在として、且つ今なされていることによって大きく規定される未来と結合して生きている存在として、考え始めることになるや否や——それで充分であり——我々は・・・

・・・亜種としてのこれらの生活過程・・・恐らくは先ずは創造的破壊が、独占とは関係なしに？・・・等しく愛すべき一個の産業・・・それは競争的である——創造的破壊と創造的には破壊されなかった人達の諸工夫、但しその彼方には保身に汲々としている人達がいる。何故にもっとも意欲的な当事者達と同じではないのか。・・・その中には価格伸縮性があり、諸企業が計画としてその存在の入り口のところにたたずんでいる時に決定されることが多い(気まぐれ)。・・・事前と事後・・・ボナンザ時代・・・生活史から見られた奔流の中の生活・・・硬直的に完全競争の緩和・・・資本主義はさなくとも良くなしたに違いなかったことを為すということを示すのみである。・・・

10 人が突然に死に直面させられた時、彼の全生活が彼の心の眼の前をよぎる、と聞いている。これと同様に、いうなれば1760年——石鹼が丁度入ってきた——から1940年に至る労働者の家計の進化を今一度

検討してみよう。そして経済史の中で得たものが如何に乏しいものであったとしても、誰の眼にも明白であろうところのもの、すなわち、その内容はコンテンツに変化のない路線上を単純に成長してきたものではない、質的变化の過程を経験してきたものである、ことに注意できる。同様に同じ期間につき典型的な農場のもつ生産的装置の歴史を検討しよう。輪作、耕耘、それに肥育の合理化の開始から今日の——エレベーターや鉄道と結合した——機械化されたものに至る。あるいは木炭炉から我々の時代のタイプに至る製鉄鋼産業の生産装置の歴史、あるいは水車から現代の動力プラントに至る動力生産装置の歴史、あるいは鉄道から航空機に至る輸送の歴史。

把握されるべき本質的な真実は「資本主義は急速な産業的变化の一形態であり、方法である」ということであり、それは事の重大性の中で他の全ての事柄をして光輝を失わせるものであるが、それにもかかわらず粘り強く無視されているところのことなのである。それは事の性質において進化的であり、且つ静態的ではありえない。資本主義過程のこの進化的性質は経済生活がおかれる社会的並びに自然的な環境——環境は変化し、更にその変化によって経済活動の諸与件を変化させる、この事実は重要であり、これらの諸変化(戦争、革命といったもの)はしばしば産業上の変化を条件付けるものである——の中で進行するという事実に根差すだけではない。更に環境の変化は原動力(**prime mover**)ではないのである。人口や資本における準自動的な増加に根差すものでもない。資本主義のエンジンを作動にセットして保つ基本的な衝動は資本主義企業が創出する新しい消費財であり、生産と輸送の新しい方法であり、新しい市場であり、新しい産業組織から来るものである。

* 10、については刊行本83～84頁に同様の記述があるが、全く同じではないので収録した。シュムペーターの資本主義過程の認識の核心部分をなす。・・・(編者)

11 新しい立場、すなわち、我々が時代に渡る過程を掌握することの内にそれはある。その過程は時代に渡って、より長くなければならず、それは企業群がある時点に存在し、且つ活動したところのもの全てに対し、その意味を与えるものでなければならない。・・・この過程が如何に遂行

されたかを検討する。・・・能動的で積極的な設問(ここでは同じ問題が他のものに変換されることができる)。・・・一財の導入・・・競争的独占化・・・独占化競争と独占の硬直的な無駄・・・予言的競争すらもが機能をもつか?・・・時代に渡る過程は重要であり、その要素である全てのことが考察されなければならない。

1 2 はかりうべき利益・・・

自動車——少数支配(*kleinen Regierung*)の発展、その場合、金融が多くの失敗を伴いながらも一個の権力に・・・

2 1年以降、三つの事業体——これらは再三にわたって提示された他者への協定がある場合においてのみ保つを得た——、それはだが価格を硬直化することを強いる。・・・産出の位置をも・・・

この極めて巨大な利益の性質・・・ここでは利潤?・・・誰がそれをしぼしの間検討し、組織的な機能の中にはないとし得るか。・・・

見かけよりもずっと効率的、様々な工夫により行き過ぎるだけでなく反復をも満たしている。その質の形態の中に、競争的紛糾(闘争)の予期し得る結果がある、更に市場の間断なき哺育があるのである。・・・

指導者の位置の喪失が忘れられてはならない、そして何も無いところからの高揚も。・・・硬直性、穏当なケース・・・せいぜいのところ騒ぎ立てられているだけ・・・だがこれを見出したあるエコノミストが反唱している。・・・鵜呑みにしている。・・・単一の売り手は、だが所与の需要と共にあるのではない。・・・行き得ない・・・スタンダードオイル・・・独占における硬直性

1 3 いくらかの産業分野で与えられた規模をもつ、与えられた数の事業体があり、それぞれが独占的に競争的な(*monopolistically competitive*)、そして同時に寡占的な(*oligopolistic*)状況下で、与えられた方法による生産を行っている、且つ特定の市場を支配している、としよう。これらの事業体は識別し得る生産物を生産し、それぞれの行動が残余の企業に問題になるほどの規模をもっている。その位置はそれ故に技術的意味で完全競争的でない。しかしこの型が——正確にあるいは近似的に——完全競争的な事業体と同じ結果をもたらすような重要な場合がある、ということが観察さ

れるべきである。

14 私が伝えたいものを最もよく描くであろう型には、更に次のように仮定が加わる。それぞれの事業体はしっかり腰を据えて自分の市場を守る用意があるが、他人の領域を侵すことは避けている、出来る限り安定したものに自分の生産物の価格を保ち、状況に応じて産出量・品質・広告努力を変えていく、ということ。これらの価格と産出量は、完全競争的諸条件の下にもたらされるであろうものよりは、価格において、より高く、産出量において、より少ないのが一般的であるだろう。過剰能力があることは恐らくは確かであろう。利潤をつくることと財をつくることの間にある敵対性は充分目立っている。

今やそうした諸型が生じ、短期的分析の立場から見ればそれらは相当に頻繁でさえある。しかし資本主義過程の中では、これらは絶え間なき嵐の中の小康でしかないのであり、且つ一般的に言って、時間のどんな長さに渡っても主張はできないものである。この事態をめぐってこうした事業体が行っている事柄が様々に——より良く、且つより安く——行うための諸計画が舞い交う。その諸計画は遅かれ早かれ具体化される。そうした諸計画が、そうした事業の一つか二つによってやり遂げられるか、あるいはその目的のため設立された新事業体によって試みが失敗に至るか、そうしたことは問題でない。いずれの場合にあっても古い構造は取り去られ、新しい構造が出現する。瞬時的または短期的に行うことに自己限定をなしている観察者にとっては、このことが政治的革命のような例外的な出来事のように映じることは充分にありうるだろう。時代に渡って——長期に——資本主義過程を調べている観察者にとっては、それは企業の精神(*the spirit of enterprise*)を身につけているわけではないような部門においてすら、生起する正常な事柄なのである。ニュー・イングランドの農業は鉄道によって滅され、高コストの小売店や百貨店はチェーン・ストアによって滅された。

15 ここにきて、資本主義のエンジンの作動についての我々の諸見解を精査するべき必要性は明白。

(1) 第一に赴くべきは、競争についての伝統的な概念を見直すことである。競争の真の挺子は新しい生産物と新しい技術の衝撃である。通常理論によって、もっぱら強調されてきた価格競争や業界参入の自由よりも、それははるかに効果的であり、「ドアの拡張と建物の爆撃」程の威力の差がある。競争の概念がこうした衝撃を含むほどに広げられると、他の成分の諸要素はその重要性の多くを失うだけでなく、異なった意味を獲得させることになる。業界参入の完全自由は、時折、遅滞的要素となることが論証せられる。そうでないと特許の授与や商標の保護を行う含意を失わせるであろう。価格の伸縮性もまた然りである。新製品と新技術の産業機構への入り込みは一般に——短期的にも長期的にも——諸価格の下落方向への変換を含むものではあるけれども、この変換は必ずしも通常の意味での価格競争のメカニズムによって、もたらされはしない。与えられた市場が一商品によって革命的再編を蒙った時、諸価格の統計が示すところでは知覚できるほどに高度の硬直性を演じることがある。内燃モーターは馬を駆逐したが、馬役はそれが広く用いられていた時よりも安くはなっていない。新しい香水は市場を征服し、消費の香水に対する願望をはるかに安く満足させる、とはいえ、旧ブランドが結局において売れている限り、単一の価格であることはそのファクトを指示するために必要でない。

(2) 我々が一時的小康として前記(1 4)した状態を享受している産業の事業行動を扱う場合ですら、従来からの分析はその状況下における一個の本質的要素を見落としている。いつの日か現在の構造を転覆する新しい何事かの侵入の脅威すらもが、一般に、長期的には産出量を完全競争の産出量に近づける事業政策を強いさせるに充分である。と言うのは、常に存在するプレッシャーを受け流すために利用可能な方法の中の少なくとも一つは産出量の規制(削減)のよって爆発することの抑制の内にあるからである。産出量の削減は——それが非正常的利潤をもたらすか否かは問わず——来るべき侵入者に対しあまりにも多くの未利用な利潤を残すことになり、以て品質とサービスといったものによってその名を確立させ、以て顧客をしっかりと惹きつけることを得さしめる、ということ。このようにして創造的破壊の過程は、それが実際にはすぐさま作動しないような場をも規律することになる。事業家達は、最近のワシントンでの聴聞において、審問家達が結局においてどんな競争をも理解することが出来ず、事業家達の言辞を分かったような顔をして眺めている傾向にあった、ということに驚かされたのである。消費者の利益という立場からみて、不完全競争の情

況には消費者が失うと見込まれるものに対する補償があるのである。

* 消費者が選択する生産物の一層大なる幅が提供されること、に創造的破壊の過程の本質の一面がある。

(3) ある寡占的グループにつき、それらの諸企業が相互に持てる市場を尊重し合うよう価格と産出量、それに融資条件を合意によって固定する、という協議に入るとしよう。ドイツのカルテルの形態の中に我々はその種の事をもっともよく思い浮かべることができる。そうした硬直的機構は絶対的頑固者達のまさしくその縮図と見るべきであろう。典型的なケースにあつては、始めは規律に従わせられているが、漸次新製品と新技術が脅威となり、実際の衝撃により吹き飛ばされることになる。すなわち十分な時間幅をとって観察すると、その時々で硬直的であるが、その連鎖で動くコンベアーにはどのような非伸縮性もありえない。しかしカルテルの諸規制が資本家の利益以外のあらゆるものに侵害を加えていることを意味することにはならない。経済生活が静態的なものならばカルテル的規制は当たり前のことなのである。それが創造的破壊の過程で充満されている時には、そうした組織構造(独占的諸方策)は長期的に総産出量の縮小をもたらすであろう、とは必ずしも言えないようなやり方で生産活動を制御し、固定し、保持することになるであろう。たとえ講じられた特定の施策が新技術の十分な利用を妨害する意図のものでも、他のやり方がとられよう。

誰かが1ポンド1セントの合成小麦粉を生産する方法を發明したとせよ。そうした恩恵を伏せておこうとする論議はない。しかしその合成小麦粉の突然の参入は小麦栽培者にとって破局であろう。その後、累進的不況効果のよく知られた連鎖——銀行の破局と小麦栽培者の需要に応じている全産業、更に全経済の破局——がある。それ故にその過程をスローダウンさせ、秩序だった撤退を許容させる論議、並びにこれまで自らを正当化させてき、破局が防がれるならば再度自らを正当化する可能性のあるところの、その持てる諸価値の不当な破壊を回避させるのを良しとするはつきりした論議はある。今やカルテルと類似の産業の自己組織化(self-organization)は——その方法が彼等自身の分野で阻止のため発生したもののか、またはその外側でのものかを問わず——ある程度には正にそうしたことを成就させるを得る。長引いた不況の時代に何故にそれが多発するのか、その理由がこれである。もとよりこの局面を政治家達や知識人達は気付いている。彼等はカルテルを業界主導でつくられた場合のみを咎めてい

るので、連邦復興局(NRA)の例のように自分達の後援下になされた場合には同種の事柄を完全に是認する。これを押し付けることと迫害することの間に奇妙な揺らぎ(vacillation)がある。これがカルテル問題の適切な提示の一つである。価格競争を制限する傾向にあるどんな事柄をもこれを無批判に責める、という通常のあり方は——資本主義的進化の設定の中では——ほとんど起こりそうにもない特殊なケースを念頭に描いているのである。利潤創出と産出量最大の間にある大きな隔たりは、このタイプの独占的諸政策が図られる経済システムの中では人が考えているほどには根拠になり得るところが小であること。更に高馬力の自動車は、ブレーキを持っていないよりも持っていた方が、一層安全であるだけでなく一層速く旅行をさせることができる、ということ。

(4) 歩調を合わせ秩序だった前進であるかのように見える「何事か」を強いるような諸政策は、どのような組織機構をも伴わずになされる場合ですら、製品の差別化を伴った寡占的パターンから生じている。その場合の条件は死にももの狂いで生き残ったごく少数の事業体だけが存在しており、しかも一方では彼等は不断に死の懲罰にさらされながら運行しなければならず、他方では些細というよりは遙かに死活的な何事かから自分達の競争者の排除に希望を託することはできない、という事実を自覚している事である。(3)での図式では硬直性の要素を強調したが、今や我々は他の要素を強調することで今一つの亜種をつくることになるだろう。即ち現代の寡占的統制は——動きとその動きの帰結に反発する防衛との間の間奏曲に替えて——累進的運動から直接的に出てくるものだという事実である。それは「あってよい」。併し事実問題として、それが常態なのである。

合衆国では少なくとも大規模産業の大部分は、このパターンに即してもたらされた。1 ダースほどの産業——この国の経済進歩のペースととりわけ結び付けられている——は、自動車から製缶に至る迄、容易にあげられようが、古典的事例として自動車産業を考えれば充分であろう。その産出の量的並びに質的な発展を見据えるならば、寡占的規制の理論が、このケースや他の類似の全てのケースでは、馬鹿げたミスフィット(当てはまらなさ)があること、並びにそれらがそうだとする根拠付けにおいてもそうだ、という事実を明らかにするのに助けになり得るような観察者はいない。ミスフィットはとりわけ不完全競争の理論、すなわち、不完全競争は「不経済に小規模な企業を不経済に過大に生み出していく傾向」があるという命題において顕著である。この命題は——読者が思うであろうようには—

一誤りでない。その設定の内部では全く正しく、しかも応用のいくつかに
おいてさえそうである。作者のない風刺は難しい(Difficile est satiram
non scribere.)。しかしここでは常識的推論を通常のルールで受け入れる
だけでよい。

我々の原理を適用するにあたって——一つの産業の歴史が全体として、
且つ資本主義的進化の過程にとって提供されるその装置舞台とも関連さ
せて、考察されなければならないし、又何等かの与えられた時点の状態の
表出でもなければ、又ある想像上の本質的には静態的性格をもつ舞台にお
いてでもないのであるが——我々は四つの明確に表示される画期を区別
することができる。先ず試行的画期があり、多くの小規模で短命に終わっ
た努力があり、そのほとんどは出発点から失敗を約束されていた。それは、
19世紀の中葉から1908年迄続いた。そこでヘンリー・フォードのスペ
クタクルな成功により始まる「ボナンザ時代」がくる。それは1915
年まで続き、数えきれない多くの損失と失敗が演じられたが、成功裡にあ
った少数のケースでは極めて大な利潤と結合していた。どのようにしてそ
れが次の画期(1916—23年)を導いたかを見て取ることは容易である。
再び多くの新規参入者が群がり来たり、その淘汰の中から幾ばくかの事業
体ははっきりと自分達の地位を確立し、多くの小さくはあるが重要な改良
がなされて引き続いて起こる生産性の爆発のための諸条件を創出した。第
四の画期はその爆発はその結果といえる統廃合、下落する利潤率、巨大三
企業の優位の様相によって特徴付けられる。この画期を通じて尚あらゆる
上昇基調で導かれてはいたが、その一方でとりわけ累進的に低落の徴候を
示していたほとんどのリセッションに直接通じていた。鉄道のもつ旅行者
と比較的短距離の貨物輸送を削減した——資本主義的世界で現実に問題
となるその種の競争の素晴らしい事例——あと、飽和とその結果である純
益の更なる減少に加えて、航空機との競争に直面することとなる。

その経過の全体を通じて、この産業(自動車産業)はそれ自体絶え間なく
動いただけでなく、経済システムの全体に力強い刺激を与えた。このこと
は、直接的にはタイヤやガソリン工業、道路建設業、販売店とサービス業
といった関連産業の発展を通してなされたが、間接的には所得と支出への
その影響——シフトされた諸財の需要表と供給表、及び刺激せられた全領
域の生産——を通してなされた。こうした全ての産出量に対してもつ諸効
果と比較すれば、この産業が自らの産出量を十分に——すなわち完全競争
の条件の下でなされていたならば達成した筈であろう程に——拡大した

か、またはしなかったか、という設問は重要だとは言えない。ともかくそれが唯一の重要事であることを止める。しかもその設問に肯定的に答えられるとしても、長期的立場に立ってのことで、短期的立場に立ってみればそうでないかも知れない。価格競争は、もとよりその三大事業体の間で欠落などはしていなかった。一方における次々と告知された「カット」(“cuts”)——主としてフォード会社によってそうされた——と他方における個別事業体の付け値(the offering)の年々の変更がある。もし価格伸縮性においてその証に今一步のものがあるとすれば、それは一部には戦時のピーク時に他産業に比して低かった価格からその引き下げられる程度が小であったためであり、一部には「下取り」(“trade in”)車に対する許容幅を変化させることによって価格を変化させようとする策のためであり、更に一部には性能における着実な改良の故にである。更に価格における競争が明瞭性において今一步であるとするれば、そしてもしそれぞれの事業体の価格が全体として一致した歩調で動く傾向があるとすれば、それは大事業体の企業戦略がある程度には競争相手の実際の動きと同様に期待される動きに即しても反応し、それ故に他の場合、つまり、そのような寡占的環境にあるのでなければ続ける必要がないような競争的闘争の結末を予測する、という事実と根差すものである。このようにして得られた諸結果は次のようなこととは異なる。すなわち一個のカルテルが、明瞭性において不足する形態においてではあるが、巨大企業間の競争並びに現存する乃至はポテンシャルなアウトサイダーからの競争が尚もこの三事業体の事業政策を規制している、という事実によって生み出されたものだろうということとは。

実績によって向上した、且つ実績によって自分達の基盤を保持、乃至拡大する、というのならば、彼等は敢えて困難な問題を持ち出し、煩わしい拘束を課し、そして外部からの攻撃に傷つきやすいような、そうしたカルテルに結合しても得るところは極めて少ないのである。得られた諸結果は古典的タイプの完全競争——規制する者の規制(the regulation of regulator)による——がもたらすであろうものとは異なる。規制されるのは状態ではなく動きなのであるから、個々の事業体が望みを託している全ては、突然の侵入による市場解体の回避であり、その傍ら守備領域の境界線が——幸運な、または幸運ではないような「当たり」(hits)に即して——拡大したり縮小したりすることを優しくさせることである。それ故、もし彼等が「海中の一滴」であったならばなすであろうこと、換言すればその時点で駆使できる諸利益の全てを十分に用いること、などはなきない。

更にそれを以て全ての競争者を駆逐するほどの絶対的で決定的なことを発生させるべきでないならば、例えば性能を改良するとか価格を引き下げるとかを徐々に、しかもできる限り他と歩調を合わせて行うのである。確立された位置、存在している物的施設、よく練り上げられた資本勘定、広告キャンペーン、よく発達させられた販売組織、各ステーションにお馴染みのサービス車のより拡大された整備、これらの全てが競争者の巨砲を撃退する助けとなることはもとよりである。しかし時の経過とともにみると、あたかもそこに完全競争があったかの如く、多分に同じ結果となる。更にまた完全競争過程にしてその進歩のペースが非常に急速であったとすれば、多くの倒産や他の避けうべき無駄を結果としてもたらしていくであろうことと比較するならば、上記の彼等の過程は程度においてずっと良好であろう。

* 資本保全についてはでき得る限りもう一度を！ だがこの視点は独占の場合においても再度くることになる。

(2) 独占行動と無駄

摘要

独占者の位置は、自分の商品に対し所与の市場を持ち、所与の需要表から独占的搾取を引き出しているような単一の売り手、ということである。充分な長期ではそうした位置は極度に稀であるが、短期にあつては独占類似体(近似的なものを含む)は全くありふれている。その中で最も重要なものは創造的破壊——不断に独占的位置を創り且つ破壊する——の過程の創出したものから構成される。新方法や新組織をもって新商品を生産している供給者の位置は、暫くの間、独占的に競争的な位置に赴く。その中には、もしその新しさが誤っておらず、且つ間髪を入れず参入してくる競争者がなければ、余剰の利得をもたらす真正の独占の要素がある。今一つの独占は鉄道や電力企業にみられるような投資の巨大性に根ざす地方的独占である。唯一の生産者であることは寡占状態にある企業以上の尚何かがあるわけではない。彼のあとを追って群がり出ようとする競争者と自分の場をめぐり競争しなければならない。独占者は潜在的競争者の脅威によって規律されているのが正常で、そうした独占者の利潤の源泉は新商品を成功裡に導入したことに起因する当面のコスト的優越にあるのであつて、何等かの特権と結びついた一種の使用税ではない。そうではなく危険と一緒にある成功プレミアムの一種なのである。独占資本主義は技術上、経営上、販売上の能率という点に関する限り、理想的に無駄から免れている。大企業においては驚くほどにそうである。併し急速な進歩に起因する社会的無駄は次の如く極めて多い。プラントの過剰ともいえる過大能力、労働者の失業と低位就業、諸サービスの重複と過大広告といったもの。併しその無駄は動態過程に生じたもので、それらの補償とのバランス関係が考慮に入れられなければならない。・・・その他 (編者)

独占行動と無駄

1 単一の売り手という言葉によって指示される状態が、人々の感じ且つ悩んでいるような独占を構成するのに、それ自体充分なものではない、ということは、我々がクールノー・マーシャル理論の諸前提を述べるや否や直ちに明白となる。この理論は自分の商品に対して一つの所与の市場をもつ単一の売り手を示し、余暇にその市場を開拓するあらゆる能力を彼に許容することによって、価格、産出量及び利潤についての法則を導き出している。技術的には些細なことだが、この理論は独占者が対面する所与の需要表が彼自身の行動からも、彼の行動に対する他の任意の事業体の反作用からも厳格に独立していることを前提としている。ところがそれがそうでないならば、すなわちその単一の売り手がその需要表のシフト——その表との関連で利潤を最大化させようとする彼の試みからもたらされるであろう需要表のシフト——の全てを考慮に入れなければならないならば、そのような場合はいつでも彼はその理論が与えているようには行動できないのである。今や、一方では典型的な独占的搾取 (monopolistic exploitation) なるものは、彼がそのように行動する場合においてのみ起こるものであろうこと、他方では産出量における永続的趨勢の分析のため問題となるほどに十分に長い期間を見据えた上で、そのように行動できるようなケースは極めて稀でなければならないこと、が明白である。しばしの間、はかない議論を引き延ばしたが、我々はこれを以て自らを容易に満足させることができる。

* この紙面の余白にシュムペーターは「遡って設定された独占者についてのヒックスの構図」と記している。需要表のシフトについてはヒックスの理論の援用である。

諸商品、例えば塩といった物、がある。または諸商品の諸グループ、たばこ生産物のような物、がある。または一つの商品の中の、言ってみれば英国人の立場からする、特別の諸数量がある。これらの諸商品は他の諸商品——その業界への参入の効果的防止こそが實際上真に独占的な位置にあらんためには必要だと要求されるころのもの全てであるような諸商品——による代替が出来ない程、手に負えない代物だということ。こうした諸商品の独占販売は公的権威によって仕上げられるであろうし、実際

に塩、タバコ、マッチ、ブランディ等についてヨーロッパ諸国では財政的独占によって完成せられたのである。しかしどのようにしてそれが他のやり方で仕上げられ得るのか(禁止は除いて)、を見て取ることは容易でない。オレンジ類とか綿花類は競争と両立することはできない。資本主義はその結果に逆らって反転する。・・・香辛料、事後的には商品の廃棄がある。・・・通常公的憎悪が、そして短命である、a) 革新過程の中で、b) しかしまた、ここでは市場の発達が。・・・タングステン無きモリブデニウム、そしてどのようにそれは適応するのか。・・・フォードの革新・・・平等の諸条件についての公準・・・短命である。・・・だがとりわけここでは、特殊な事情にある場合を除いて、市場の創出と結び付けられる。・・・パテントは充分でない。・・・独占要素は利潤である。

2 濫用・・・

単一の売り手——いかさま・詐欺——は法制的に設定された場合にのみ存在し得よう。属性はそれに適応することではなく、この場合にはそれ自身である。

3 諸利潤、独占におけるその性質・・・

独立需要・・・しかし反作用がある、a) 作用による回復・・・b) 独占体が需要に即してはなし得ることが何もない程に、独立需要が不適切ではない場合・・・

資本の自己調達・・・そして全くもって巨大な装置・・・それは新しい方法、あるいは少なくともより良きリーダーシップを意味する。・・・U.S スチールではそうでない。・・・諸条件・・・囲い込みの創始・・・かくして、それについての利益は何なのか。

4 トラスト破壊(独禁法違反による)は個々のケースの不利益の上に基礎付けられるものでなければならない。だが私はただ一個の命題を確立しようとしているだけである、ということを考えてほしい。・・・

14～18世紀における我々の独占の中において、商業(Handel)、付帯的
事実として冒険がある。・・・

憎悪——だがそれは匹敵する機能をすでにもつものであったということ、
事後的に与えられた諸状況の下での命題であることが必要であったとい
うこと。・・・

5 16世紀と17世紀に——そしてそれ以前においてさえ——例えば
英国で創出され、例えば廷臣といった有力な諸個人のために存在した、と
いった類の独占について主張しておくべき論点がある。それは単純に公衆
を搾取する一方法であって他の如何なるものでもなかった。それ故にどん
な政治家も独占という単なるその名称だけで理屈抜きの嫌悪を掻き立て
られ、特に英語圏では攻撃の対象となっている。しかし真正の上記のケー
スの独占と結合した場合は極めて稀であり、他のところでは全く良識的な
人々が——ひとたび独占なる言葉が議論の中に投げ込まれると——合理
的な論議の余地をなくしてしまうに至っている。資本主義システムに反対
する道徳的、並びに文化的なヴィジョンをもつ現代のエコノミスト達があ
た得る限りの頻度でそれを用いていることに意を注ぐのは驚くべきこと
ではない。その同じ時代画期の事業的諸独占すらも真正の場合でなく、
我々が今描写しつつあるものの仲間ではない。

立法的、乃至は行政的行為により作り出されたものは除くと、クールノ
ー—マーシャルの記述に答えた独占体が一時的だけでなく長期的に存立
し得るとなれば、それは供給される原料の利用可能な全体を単一の売り手
によって管理するところからのみ発生し得るであろう。この原料は特定の
諸目的に必須のものであるだけでなく、その売り手は言ってみればその
使用における「需要表の持ち上げ」(raising the demand schedule)の可能
性、または他者を征服することの可能性について考慮を払う必要が全くな
い、という状態が十分に確立されている条件がある場合である。そうした
パターンに近似しているとみられる事例があることは疑いない。19世紀
のある期間の水銀はその一例である——ほとんどがアルマーデンとイド
リアで生産され、ともに金融グループによって管理されていた。カタンガ
のラジュウムは今一つの事例である。しかしこれらの例は極めて少数であ
り、しかも極めてかけ離れた場合である。アングロ・アメリカンの世界は
特定の諸原料を制することによって他の諸国に圧力をかけることができ

たのだ、と示唆されてきている。この政策の弁護者達の中の比較的良質の告知者は——素人ならば考えかねない——そうした貿易品目の目録のどれにも意を払わない程に慎重であった。そのようにそうした物品があっても、それらの内の単一の物品が単一の売り手で管理されたとしても、独占の真正のケースを生み出すわけではないのである。たとえ、もしそうした物品の全てが単一の売り手によって管理されていても、資本主義世界によって課せられたどんな独占由来の制限もが——量的重要性においては——事実そうであるように小であろう。更に必ず発生するに違いない技術上の変革によって尚一層に小となるであろう。完全競争は実際には——農産性の商品を除くならば——極めて理論の上だけのケースである。だが長期の独占もはかり知れない程に理論の上だけのケースなのである。

* 「その原料が一国でのみ見出されるということだけではもとより充分でない。あれこれの独占を一国がもつことにつき語るのは不幸な言葉の誤用の他の一例である。」と余白に記している。

短期にあってはこれと反対に、独占的状况は——近似的なものを含めしめるため独占類似体(monopoloid)と名付けるならば——これは全く普通のことである。二種がある。その一は例外的環境の所産である。オハイオ溪谷のある村が浸水によって島となることがあると、数時間または数日間はその村の雑貨屋は独占者となろう。今一つは絶え間なく独占類似現象を創出しては破壊するという創造的破壊の資本主義過程の産物である。この種類が——我々にとって——唯一重要なものである。それに属するいくらかのケースに短く注意を払うことにしたい。すなわち、もしある企業が新しい商品の生産を始めた、乃至は新しい方法で元からの商品の生産を始めたとすると、この企業は少なくともしばらくの間は「独占的に競争的な」状態に向けて動くであろう。事実、このことは独占競争の理論を適応するための最も興味深い機会を与えるものである。そうした企業が——その新規性が失敗でないならば——正常に取得できる——その場合競争が瞬時的にその企業の歩みに随伴して起こることはなかったとして——それ相当の余剰がある限り、我々はその中に「真正」の独占の一要素があると言ってよいであろう。しかし我々がこのように言う時、即座にも我々はこれはある有機的な機能を充たしている独占の極めて特殊な種類のものであること、及びそうしたものとして独占とは結びついていない諸結果に対応したものであることを付け加えなければならない。このことに似て、もし我々が人的努力に由来するあらゆる報酬を賃金と言うならば、そのような

報酬部分を賃金余剰(surplus wage)と呼んでよいだろうが、非常に特殊な賃金であることを認識しなければならないから、そのように呼ぶことで得られるものは多くはない。・・・更に支払われるものとしての独占的利得は地代とアナロジーをもつ。・・・自己防衛、埋蔵資源を買い占めたアルミニウム産業、・・・a) 事前に b) 開発するための手段をもつこと。

* 関連して次のような余白への記入がある。

「地方的な独占——鉄道と電力、その根拠は資本の巨大性に起因する。・・・最も巨大な企業が最も収益力の大きな企業ではない。・・・何故過大なものになったのか。・・・その地位を十分に利用し尽さない独占者はそのように振る舞うことはない。鉄道はどこに？それに競争が不可能な所での場合は？・・・パテント、支出・・・」

19世紀に一企業だけで生産されていた自動車、その唯一の生産者は——独占者ならばそう行動するべきだと想定されることをなさんがためには——その時の馬や馱馬車等は優越してはいないが受け入れられ得る代替物であったのだが、そうした代替物に対して存在していた需要に照らして正味の余剰(net surplus)を最大化させるような価格で自動車を提供しなければならないだろうか。そのようなことを為す人物は明らかに変人であろう。実際には、前方にぼんやりと見える一層大なる市場の誘惑と危険の双方が、その新商品の唯一の生産者をして完全競争の諸条件下で生産者が行動を強いられるのと多分に同じように行動するよう誘引する、というのがあらゆる正常なケースであろう。

寡占者達が潜在的競争の脅威によって規律されているのが正常である、ということは前に指摘し尽くされた。このことはここでのケースにあっても同様に真実であることを保っている。寡占的パターンの中で争い合っている企業におけるよりも更に明瞭に、我々の単一の生産者が産業的オーガニズム——そこでは競争者が彼を追って群れ出してくることは間違いなく、しかも彼は自らの需要を作り上げるに至っている状態がある——の中で自分の位置のため競争しなければならないことに気付く必要があるのである。需要を発展させようとする努力は通常その新製品が遂には置き替えられる迄続く。どんな場合でも数十年の問題である。彼がこうした諸条件に従って自分の産出の量と質を制御している限り、彼が物事の正常な道程の下では独占者たるべく行動し得ない、という但し書き付きでのみ独占者と呼ばれることができよう。

諸利潤の源泉は新商品(乃至は新方法)の成功裡の導入に付帯した臨時的なコスト的諸利益の中にある。更に諸利潤は資本主義過程の原動力である特殊な種類の偉業に対し与えられる諸賞金(premia)である。實際上あらゆるコストを超えた利益の余剰は「真正」の独占に由来するものを除けば、好況と不況の交替——これもそれ自体資本主義の過程と原動力に起因する——の継起に即した諸好機(最も広い意味での投機の諸機会)に対して「当たっていた」か、「いなかった」か、に帰せられるものである。諸利潤はそれが動きゆくものである限り「特権的使用料」(tolls)として述べられることができそうにない、ということが強調されなければならない。そうでないと我々は諸財の流れを増大させる支払いを呼び出すようあらかじめ準備を整えているということになる。更に進んで諸利潤の性質から次のことが導かれる。ある企業が損失になっていない場合、期待された利潤はほとんどの場合——急速の減価償却を行う、あるいはそれを以て失敗の嵐を乗り切る、あるいは損失を補修する基金を造出するため——十分な準備ができるほどに大でなければならないということ。厳密に言えば正味の利潤(net profit)は工場施設の廃棄価格にまで償却済みの状態に至る迄はないのである。また実際に失敗した時立ち返るためのオーナーの基金の蓄積なしには計画をもつ大胆性と自由はあり得ないのである。事業体はその道程を走り終える以前にサービスや報酬を査定することはあり得ない。その時正常以下の報酬が展望されるとしても、それは正常以上の報酬と一緒にになっているのである。また正常以上の報酬は他の事業体における正常以下の報酬か損失と一緒にになっているのである。「もし支払うべき利潤なしとすれば、その財貨がどれ程により安価で消費者に届けられ得るか、を考えよ」と大声で叫ぶことを為し得るために、頂点的成功だけを更に最も都合よく選ばれた時点においてのみあり得るような成功を持ち出すのはナンセンスである。

* 余白に記している。「この命題は詳細さを欠き、また教条的に読まれるに違いない。しかし私の書、景気循環論で発展させたもので、歴史的、且つ統計的に十分な詳細さを備えている。」・・・余白に記している。「社会主義においても尚も必要、——再度に渡って現在あるものに賦課し、価値を保全し、前進のための諸手段を大にする。」

必要利潤の概念——創造的破壊の過程を推進していくのに十分なほどに大な利潤——は上記に留意された、これらの諸概念のいくつかについて

の包攝によって拡大されるべきである。成功裡の事業体の生活によりカバーされる数十年の期間に渡って、その都度都度の状態は——その事業体そのものの行動とは独立して——「真正」の独占者として振る舞うことをその下に得さしめるような諸原因の所産であろう。そうした望外の事(windfalls)は、これを事後的にみれば、産出量の増大を伴ってなされるべきような何物も持たないということになる。しかし事前的にみられるならば、産出量の増大を伴ってなされるべき多くのものを持つのである。事後と事前は長期に渡る事業計画の基礎となっているチャンスとリスクの——意識の、または意識の下層にある——バランス関係の下に姿を現す。それ故にそれら——その都度その都度の事業計画——は、全ての企業がその中に生じ、且つ企業がそのために生産スケジュールを形づくるところの、一般的図式の中の一部であり、一片だということになる。

創造的破壊の規律的効果はあからさまには結局において働かないか、あるいは効果のあるものになるかは非常に長い時間を要するので結果は同じだ、というケースがある。鉄道や公共施設は實際上地方的に「真正」の独占的位置を獲得し得るであろう際立った事例である。公衆が独占的地位を見るのに人さらい達を見るのと同様のものがあるが、鉄道や公共施設は——人さらい達が独立して存在するものを搾取するのに対して——後に搾取するものを先ず最初に創出する。圧力は一般的経費(the overhead)の中の絶対的、及び相対的負担分に即して主張されるのであるから、需要を育むことの必要性はここではとりわけ重要となる。前のパラグラフでの行論がここでも真実であることを保っている。とりわけ諸商品と諸地域の等級の間に設せられる差別化に起因する独占的利得に関しては、今世紀の発展はそれなくしては不可能であったろうこと、並びに差別化に関係する様々な利害関係に対する利益と不利益の静態的バランスは——差別化の方策には現行の特に法制的理論が認めているよりは遥かに好都合なものが多くあるのだが——我々の問題とは完全に無関係であることを告げれば充分である。しかし鉄道や公共施設が進歩の伝達機関であったこと、彼等の悪事にも拘わらず産出に及ぼす正味の効果は制限的であること以外の何物かがあること、を否定する考えをもつ者は嘗てなかったのだから我々はこの問題にこれ以上入り込む必要はない。

利潤がもつ消え易いという性質が明らかにされるや、新製品を生産するどんな事業もがそれを保持することが、更にそれが蒸発してしまった場合であれば、適当な価格政策や数多くの工夫によってそれを何か他のものに

再生させることなどが試みられよう。諸々の工夫のうち、パテントのような手段は法制的に認められているが、その一方で法や世論はその他の諸工夫に対してどちらでもよいか、または敵意をもつことであろう。技術的な経験をできる限り秘密に保とうとする諸方策に対しては前者が、公共機関の官僚達から優先的取扱いを確保しようとする諸方策は後者が相当しよう。我々の立場からすれば、危険度のより高いタイプに企業は——あらゆるそうした防衛の手段が効果的に禁止されていたとし、且つ誰もが前もってそのことを十分に了解させられていたとなすならば——参入を許されるのは通常稀であろうということを付言しておく必要がある。この意味において制限的な独占諸政策は時代に渡った総産出を減少させるよりもむしろ増加させる装置として働くことが充分あり得よう。

しかし今一つ疑問が読者に起きるかも知れない。単一の売り手であることに留まるか、またはそのようになれるかに全神経をとがらせているような個別事業体——彼等が実在しているとしてこれを見出すよりもイメージすることの方が容易であるのだが——を考えるならば、これが私の叙述、彼等は成功している場合ですら独占者として振る舞うことは一般的にできないということに、如何によく一致しているかに驚かされるであろう。されば、何故にそうすることがかくも困難なのか？ 我々は単一の売り手の地位が、価値がないなどとは言ってこなかった。我々は単一の売り手が競争者を惹きつけるには、あまりにも短命であるような例外的に景気の良い状況下の利益の享受のできることを、を検討してきた。そうした好機会をフルに利用するのが大規模な単一の売り手の政策だとは一般化し得ないが、彼等は景気の悪い短期の状況下ではその単一の売り手の位置の利益をフルに利用する。彼等にとって、自らの商業的、並びに金融的構造に対する恒久的侵害を伴うことなしに、これを達成支配することは、如何なる競争的ケースの下でなされるよりも、限りなく容易である。これは「硬直性」の最も重要なケースを含むことは確かであり、その硬直性は秩序混乱的な——それはまた秩序安定的でもあるような——効果を全体としての経済のシステムに及ぼすことはあり得る。しかしそのケースは長期に渡って邪魔されることのない計画に展望を増大させたケースであり、且つまたそれは、独占的搾取が長期に持続するということを導くものでもない、すなわち、総産出量はこの体制の下では、競争的諸条件の下であるだろうよりは、より低い率で増大を持させるということをも導くものではない。

* 余白に次の書入れがある。「相当の期間に渡ってすら、こうした好機

会を充分に利用する小規模な単一の売り手がある。その根拠はその分野ではそこに侵入することを図る者が誰もいない程内容が貧しいからである。このケースは誇大に言うことも、無視することも同じくよくない。」・・・
「ここにおいても、独占者についてのヒックスの構図が・・・」

6 我々はどんなケースであれ、知られざる真実以外の陳腐なことを教説することに罰を蒙ってきたので、私はここに述べてきたことのほとんどすべてが「トラスト問題」——合併という手段、または「トラスト」によって創出されてきている単一の売手の位置、及びそれに接近しようとする位置の問題——にも当てはまる、と指摘することで締めくくってよいのではないかと思う。トラストの形成過程に新しい技術的、あるいは商業的な諸原理が入っていなかったとしてすら、トラストは全ての教科書に指摘されてあるように「合同せられたる諸産業の合理化を目指した再構成」(the rationalizing reorganization)という点でカルテルとは異なるものであるから、そこには常に一個の新しい管理上の原理が含まれているのである。それ故にそれは存在している諸事業体の単なる独占化であろうよりも、何かもっと多くの含意をもっているのである。単一の売り手の位置の征服はそのケースにおける多くの要素の一つ以上のものでは決してないということである。そしてそうした位置に随伴した進歩について語ってよい事柄なのであるから、事情の如何を問わない「トラスト訴追」(trust busting)は許されない。それはマンチェスター型自由主義の時代の立法的サバイバルによる政治的搾取以外の何物でもない。どんな意味のものであれ、何等かの特定の告訴にはそれぞれのケースにあるデメリットに眼が向けられなければならない。

* とりわけ社会主義者の立場から、1) 明らかにふさわしいものであるように、2) 十分に温和な不況に答えるものとして、権力を規律し、且つ示す、という試みの中に訴追の意味がある。・・・

研究は常により広い枠組みと、より広い帰結の原因となる。・・・

そしてデメリットはより近年の資本主義であるほど極めて頻繁となる。過当競争(cutthroat 首切り競争)といったことは、社会的機能(役割)をもたない。・・・管理への言及は、よりベターにならなければならない。・・・誰がどのように管理するのか?・・・U.S スチール——巨大コンチェルンであることを示していない。・・・管理がトラスト化した産業そのもののそ

れであるのか、またはそうした産業における蓄積が侵攻することを許さないような他の産業についてのそれであるのか、は「与えて着飾らせる」類の空疎な章句のように内実がない。

7 無駄(浪費)・・・低位就業・・・現地人のように働く。・・・そしてそこにはおびただしい小企業がある。「小規模に過ぎる」、「おびただしさに過ぎる」。・・・単なる規模について我々はすでに今や尚確かなものとして語っている。・・・独占化のもつ利用し尽くさないこと。・・・

まさに同じことが、あまりにも速く、またはあまりにも遅くなされ、しかも追求される。・・・硬直的な短命のシステムのもつ伸縮性に対するに持続的な伸縮性・・・何事がこのようにその大きな背理を好んで保つものなのか。・・・

硬直性と浪費、どこに・・・先ずは「第2」に対してあり得よう。・・・それらは見かけほどには硬直的ではない、だが、硬直性が単純に欠点でない限り。・・・

もし濫用に即して我々がそれ自身に濫用でないことを意味させるならば、置き換え——その場合、不完全性が便利である。・・・事後と事前・・・

8 無駄(浪費)についての反対の概念——否定はしないが、単純ではない。・・・急速な進歩、現地人のように働く。・・・悲劇的・・・広告・・・だが他の関連で経済に向けて保証しているところは大きく、そして都合が良いかどうかという設問には関係がない。

規制(制限)は機能をもつ。・・・そして機会の完全利用・・・事後的、資本価値の保護・・・無駄・・・独占規制的な生産物(monopolrestrictive produce)・・・労働者の買収ですらある。・・・宣伝はその場合他の事柄をもついでに含むものである。与えられた諸関係の下での価格競争があまりにも強調されすぎた。そこにあるものは単に機構の一部である。・・・完全競争・・・どこへ導入するのか。・・・

新しい硬直性についての行論はそれに迫るところがほとんどない、a) 新しくないが故に、b) それほど重要でないが故に。・・・独占は、a) 破壊されるものかも知れないし、b) 長続きさえするものかも知れない。・・・

9 今やエコノミスト達は無駄(浪費)についての狭い観念を洗い落とし、そして今一つ概念——それは内に時間次元を含まなければならない——を認知すべきである。社会的無駄であるところのものは何等かの貨幣的・非貨幣的な報酬の中の非生産的なもので、そうした行為乃至は条件に責任を負う作因者に対するものは除かれる。それは経済の有機的構造の中の個々の場所と与えられた時点での表出であって、時間の経過の下での有機的過程(organic process)の中での一つの要素として考慮されるのなれば、必ずしも無駄多きものではない。逆に言えば、我々が無駄ということに意味付けようとしているものは、観察している期間の長さに関して相対的に存在している。

* 個別の事業体の株主の立場からの無駄と社会——この場合他の人々——の立場からの無駄には明瞭な差がある。ここでの無駄は後者のものである。

ある意味では「独占資本主義」(monopolistic capitalism) はほとんど理想的に無駄から免れている。ほとんどではないとしても多くの大規模事業体群は、技術的・経営的・商業的な能率において驚嘆に値するという意味でそうである。もう一つの意味では、産業は無駄を避けるという視点からその過程の管理につき、累増的に多くの事を学んできているが、独占的諸方策はその注目すべき諸事例である。しかし我々はこれと同じくその中にも社会的無駄の極めて由々しい源泉が存在しているような諸事例をもっている。その人目を惹く事例は保有せる生産諸資源をフルに使用する能力がそのシステムの中に欠けていること、——設備の過剰能力であるとか、労働の低位就業や失業によって演じられるが如きがあるということである。我々は失業を無駄の立場から取り扱っている、由々しい問題ではあるが。

しかし我々がこれらの諸現象を進化過程の舞台の中に位置づけるや否や、そこからの推論は上記とかなりの程度に違ったものとなる。急速な進歩は急速な陳腐化を意味する。未だ廃棄には至っておらず、だから充分には使われていないか、または間欠的にのみ用いられている、といった類の陳腐化したプラントは帳簿上、乃至は統計報告の中ではまだ生きている。急速な進歩は更に需要に先立った建設を緊急の事としており、それはすぐには利潤をあげて用いることのできない生産能力を創出することになる。第一の——陳腐化の——ケースでは結局のところ損失はない。第二の——需要に先立った投資——では、損失はあるとすればあるのであるが、それは産出の急速な拡大に対して支払われる価格の問題だということである。展開過程の交差関係に眼を向けることの稀な観察者には双方のケースが完全な誤導の光の下に現れる。急速な進歩は不断の変動——好況と不況の循環的交替を意味する。設備はその着工から繁栄の局面でのみフル稼働されるよう企図せられたものとして建設され、沈滞局面では縮小が過剰能力と失業の双方において発生するであろう、という帰結が結果としてもたらされることになる。

他の社会的仕組みによってそれがどのように避け得るであろうかに関し意見は様々であろうが、これが資本主義の無駄であることは疑いない。しかしこの無駄は総産出量が拡大する速さの一局面、言ってみれば、熱病的成長に随伴した無駄であるだけのことであり、成長のペースが減速するならばなくなるであろう無駄であるから、次のように言われなければならない。だからして資本主義過程のもつ無駄の充満のせいにするので、観察された産出の増加率が無駄に帰せしめられることはできない、という命題は支持されることができないと。急速な拡大に対して支払われる価格としての無駄は社会主義でも発生するか、を言うのは容易でない。社会主義の純粋理論に従えば次の場合にのみ支払わなければならない。将来の需要を展望して、特定の設備が現存する補完的設備の能力と併せて用いることができるよりは、もっと大規模なプラントとして設備された場合。

独占資本主義のパターンの中にある諸資源の低位利用に対しては他の諸理由がある。しかし我々が注意した諸原因の結果を割り引くならば、考究されるべく残されているところはさほど多くはない。更に加えて補償の問題がある。私が誇張されて強調されていると信じている例は——ガソリンスタンドに古典的な事例をみるような——小規模で非能率な企業群と共に運行しているいくらかの特定の諸部門を溢れさせるという独占競争

の傾向に向けられたものである。だがこれは一時的なものとしてはそうであるとしても、一つの方法、失業の特に注目に値するタイプの面倒をみようとする非常に経済的な一方法であることが看過されるべきではない。もてる熟練が使いなくなった熟練工達はガソリンスタンドを営んでいる場合よりも更に悪い状態に至ることがあり得ようということ。

他の事例は広告や他の販売上の支出より提供される。その支出の額の全体でなく一部、特にある供給源から他の供給源に常客を移動させる、それだけの結果しかもたらさないような競争的広告の部分における出費の無駄である。いくらかの場合、出費は広告される物を生産するのに使い尽くされた資源の方を上回るほどとなる。そしてその物は広告あるが故にのみ受け取られる。そうした場合、経済的成果の指標として産出額それ自体が馬鹿げてみえる。20年代を通して我々はこの国で筆絶の販売活動の爆発を目の当たりにしてきた。一部にはすでに馴染み深くなっている筈の新しい消費財の奔流に根差すものであったことは真実であるが、我々はそれらの正常な重要性を誇大に叫ばれることに多分に平伏させられたのである。広告等の支出にどのような重みをつけるか——広告等に替えて生産者がどこまで品質とサービスの改良を重視するか——は正確には印象の問題を残している。消費者教育が将来におけるそうした支出の重要性を恐らくは切り下げよう。

もとよりどのような種類の無駄も——たった今、そしてその前に注意した二種類を含んで——諸資源の不適切な配分として述べられて差支えがないと思う。しかし我々はこの語を狭義に用い、それに第三のタイプの無駄という標題を与えたい。我々はそこから道徳的立場からのものは除きたい。例えて言えば、諸サービスの二重化と重複化は事業の通常の実行においても、産業グループ間のシェア戦争(rate wars)のような争いの中においても、一般に発生する。これは実は過剰能力の特殊なケースなのであるが、いくつかの興味ある論点を描き出すため分離して配慮されてよい。産業的パターンのきちっとしたバランスは、たとえそれが完璧に構築されたものであったとしても、急速な進歩の過程で急速に崩れるものである。諸改良が常にそのパターンの特定の要素と衝突し、ある部分では二重化をもたらす、他の部分ではボトルネックの困難をもたらすからである。しかしまたサービスの二重化は——競争の理想的な形態ではないであろうが——その非常に有効な形態であり、しかもサービスの質を他に替えるものがないからの故を以て保証するものでもある。その合理性は多いか少ないかの問

題であり、事業は補償のない無駄を示すであろうような過剰を防ぐための十分な動機と諸方法をもっているのである。他方においてシェア戦争は、社会にとっても総産出量の立場からしても、混じり気なしの諸悪ではないことは明白である。それは諸価格を、これ以上のものはないという効果を以て、且つ他のやり方でならば価格が本当に硬直的となったかも知れない局面で、引き下げるのである。

あるいは次のような無駄がある。私的企業を導くコスト計算は社会的に資源の適正配分を保障するであろうコスト計算とは一致しない、と論ぜられることがある。それは正しい。煙害や失業支給は公権力によってそれに入れさせるということでなければ、コストの私的明細の要素にはならない。しかし非常に多くのケースにおいてコスト計算の私的な方法は急速な進歩に好都合であり、かくして産出量の発展を利するのである。この考慮は厚生立場からは必ずしも決定的でない。それは我々の問題から離れている。

* 余白に「このことは最初にピグー教授によって強調された」、とある。

そのタイプが社会的に不適切な配置であることを推測させるような他の諸理由がある。諸資源をある産業から他の産業へ移し替えることによって産出量が増加させられるような諸ケースが不完全競争の諸条件の下でしばしば起こるのである。不完全性とは離れてさえ、もしある産業がコスト引き下げを図りながら産出を拡大することができるのならば、そうしたことはあるだろう。それにも拘わらずどんな単一の事業体もがそれをなすことができない(外部経済)。そうしたことは本質的に定常的な過程では極めて重要なことであろう傍ら、正確にはそれらは創造的破壊一般が、とりわけ巨大事業体の進化が消失していく傾向にある、という類の事柄なのである。

* シュムペーターは、R・F・カーン「理想的産出についての若干の覚書」、エコノミック・ジャーナル、1935、5月号をあげている。

あるいは我々は基金、とりわけ諸々の貯蓄の無駄遣いの事を考えてよいのかもしれない。すなわち、それらが「エンパイアビルディング」の中に消えてしまった、あるいはある個別企業執行部の個人的利益のために浪費されてしまった、という無駄である。ここでは諸々の基金の不適切な配分

と実物資源の不適切な配分との間を区別する必要がある。金融グループの征服戦争の中で直接的に浪費されるのは諸々の基金である。それは疑いなく——それ自身の中ではなかったにせよ——実物資源の不適切な配分を必然のものとする。しかしながら、株式の売買戦略とその類の全てが如何に道徳的に非難されるべきもの、あるいは美学的に醜悪なものでありうるにせよ、また投資の導きの糸を手中においている案内人達の行動が如何に策略に満ちたものであるにせよ——確かに資本主義は「その運命を嘆きながらも社会主義者達に仕事を託すような平均的資本家」に対して優しくはない——、直接的には彼等投機家達はこのシステムの生産的成果を凶るための何物をももっていない。しかしほとんど休むところのない金融的海賊達は自分の戦利品たらしめようとしているものについて高度に生産的なアイデアをもつのである。持ち株会社のスキャンダラスな行為はその経営している会社の卓越した経営管理——管理の能率は持ち株会社によってもたらされた統合によって増大させられる——と両立し得るのである。かくして他のやり方では難攻不落であった競争的位置の金融的征服は合理化過程の中の偉大なる一步を語ってよいのである。英国採炭業とそのイギリス諸産業に対する諸サービスは、そうした方法の適用が問題外であったので、より良き姿を現してはいない。「コントロール」はその果実によって判断されなければならない。それは怪物(a bogey)であることを止めるべきである。

他の諸事業体や諸産業の上にかぶせられる、あるグループのコントロールの拡大は産出量の拡大に対し有害であるとは必ずしも言えない。たとえそれが競争しているグループを無力ならしめるため投資されたものであったとしても、例えば電力事業がガス事業の中に何等かの支配権を買い取るようなことであっても、整合の効果をもたらす私が秩序ある前進と呼ぶものの諸利益は産出量の増加において——それが他のやり方で行われるよりは——より大きな効果をもたらすであろうことは多分にあり得ることである。このことは競争者を無力ならしめることで得られうる展望が征服した設備を新しく持つことの中にその本質的要素があるのだろう、という追加的考慮とは全く独立している。諸資源の配置なるものの不適切な判断は——究極の帰結の考慮なしに展望されている場合の不適切だけでなく、産出量の長期的増加率を引き下げるとみる意味でも全く不適切なのであるが——以前に了解されたところのエコノミスト達、並びに政府委員会のメンバー達におけるほどの甚だしさはない。もとよりあるグループはある事業に及ぼすコントロールを、「目の玉を抉り出す」ことをなさんがた

めに、あるいはまたその設備を低位操業におくことでもたらされよう臨時的余剰を盗むためか、またはその株式に適切な投機を図るために、獲得することはあるだろう。またあるグループは買収されているが故に不利益な契約をなし、あるいは展望がなくなっている部門に介入せんがために、ある事業体に支配権を行使し、しかも資金や金融を供与することもあるだろう。過去の歴史はどこでもそれはあり、とりわけ他の国よりもその傾向が大いに満ち溢れているこの国においては、事例は充分である。設定されたケースの数と重要性は、しかし産出の趨勢についての我々の結論がこうした点から正しくないのではないか、という疑惑を正当化するものではない。将来にはこうした準犯罪的——または単純に犯罪的——な方策はさほど容易ではなくなるだろうし、正直な失策の役割はあるとしても、それらが今あるのが常であるよりも少なくなるだろうという明白な諸根拠がある。

他の事業体にある利用可能な余剰諸基金の投資から引き起こされる実物諸資源の誤投資(malinvestment)を期待する根拠は——失策は除き、また買収といったことがないとすれば——何もないということが忘れられてはならない。と言うは、もし投資している事業体に資すべきはっきりとした利益がないのならば、投資は単純にあってしかるべき利潤期待によって導かれていることになるであろうし、更に社会的諸結果もそうである限り、その絶対的完全にあるという自負から投資している事業体そのものを配するよう選好されよう。完全に名誉あるものであっても、しばしば社会的無駄のカテゴリーに入れられるような方策はあるが、それは一般律からの逸脱であることは明白である。こうした全てのことは査定することが極端に困難である。それらを正当化するためには観察者は極めて多くのケースに深く通じていなければならないし、問題にしている事業社会のもつ精神と一般環境に深く通じていなければならない。全く経験のない人々が最大限の確信を以てこれらの事柄をのたまうことに我慢するのは、これまた困難なことだから、こう言うのである。・・・

* 余白に記入、「ここで尚、無能と同根の問題につき何事かを・・・だからして、しかしながら、この他に、とすれば、といったこと、だがそれらは特別の状況、例えばインフレーション、に対する意味だけを持つ。」

10 我々の行論が完全競争についての我々の意見に如何に依存してい

るかを示しておく必要がある。これまで検証された論点のほとんどが、独占類似体の資本主義を明らかにしたのと正確に同じ程度に、完全競争の後光(halo)を曇らせている筈である。

我々の前任者、更にもっと前の世代の人達——おおざっぱにはミルとマーシャルの間の一世代で、その素晴らしい例はかのイタリアの指導者フランチェスコ・フェラーラ(Francesco Ferrara)である——でさえもが、完全競争に対しては、その無条件の賞賛から離れて漂流していると感じていた。一方ではマーシャルとエッチワース、それに後にはピグーや他の人達、は完全競争の諸特性についての一般的命題が真実であることを単純に止めるようなケースが数の上で益々増大しつつあることを見出してはいた。例えばどんな所得配分のあり方をも一個の与件として受け入れている場合ですら、完全競争が諸資源の理想的な配分を保証し、以て最大産出量をもたらす、といったことは真実ではない、と。他方では、同じ経済学者が明らかにしているように、たとえ完全競争的なパターンが実際に——ある粗雑な分析が我々に信じるべきものであったが如くに——達成されたとしても、その諸々の功德は、その条件の下で全ての人々が自分の為し得るベストを自分自身のために為すように試みる時、達成されるであろうような大きなものとはならないであろう——そうした諸条件と両立し得る満足の極大よりは大な量にはならないであろう——ということである。この命題は一見したほど陳腐平凡な命題ではない。それは数々の経済的行論において、例えば、これらの諸条件の変更なしに経済活動に影響を及ぼすことを狙った諸手段の効果を扱っているすべての行論では相当の役割を演じている。しかし我々の一層に遠い先祖達が信じたように、完全競争があらゆる時代とあらゆる場所で完全に理想的状態だと我々に信じ込ませるには、根拠薄弱なものがあるのである。

* 「関連文献には、またもやカーン氏の前掲した論文があげられてよい。しかしその主題には数多くの貢献が今日でも続出している。」

現代の——主として大戦(第一次)後の——の理論はそれを飛び越えて進んだ。経済過程の動態的諸局面の理論の発展の中に——言うなれば、何等かの攪乱に対する反作用の継起に、それらの様々な速さに、経済行動に及ぼす諸期待の影響に注意を払うことの中に——現代の理論家達はその古い図式を疑問視するに至った。その古い図式は、最初にワルラスによって発展させられたものであるが、それに従うと経済的均衡は非常に安定した

状態であって、諸価格や諸数量においてどんな変化が起こったとしても、その変化は速やかに吸収され、しかも滑らかに自己適応をさせる、となすものである。ところが現実には、際限なき期間に渡り、しかも一時的にはカオスの目立った招来をもたらすような、激しく、且つ爆発的でさえある諸変動の可能性があり、更に競争的システムのもつ自動制御と伸縮性(automatism and flexibility)に帰せられてきた回復の効果は、結局のところ幻想的であるようにみられた。我々は創造的破壊の過程の荒々しさを強調しているのであり、こうした諸考慮は付加的な重みをもつだけである。

現代産業の下では、独占類似体的諸要素こそが単なる随伴的要素でなく本質的要素であることが認知せられるや、完全競争に都合良き諸ケースの全体は直ちに瓦解する。過去50年間に渡る資本主義の偉業はそれらの要素なしには不可能だったのであり、極めて重要な諸局面においてそれらの諸要素は単なる必要悪ではなくして有機的諸機能に資すものであった。生産の現代的な方法が単に巨大設備を必要とするだけでなくして、巨大事業体をも必要とする。その限りにおいて、また巨大事業体が独占的諸方策に対する展望と手持ちの諸資源をもつことなしには創設され運営されることができないものである限り、完全競争を願望することはナンセンスである。

現代の産業的巨人たちが真正に独占者の位置に至るところ未だしの状態であり、且つマーシャル-クルノーの図式に従って開拓する事業体に設立の道をあけておくことがあったとしても、上記したことは真実であることを保つ。と言うのは、ある限られたケースを除けば、独占価格は常に競争的価格よりも高く、そして独占的産出量は常に競争的産出量よりも少ない、という理論は厳格に「同じ条件の範囲」(ceteris paribus proviso)の下でのみ妥当であるに過ぎないからである。言ってみれば、相互に一方は完全に競争的であり他方が完全に独占的である場合以外には他の如何なる状態も絶対でない、という点で他の状態と区別されるような二つの(等しい可能性である)状態を比較するならばという場合においてのみ正しい理論なのである。その条件が満たされない時はいつでも、言ってみれば、独占化が技術的・商業的・管理的な資質によって費用削減的な諸改良の導入を意味する場合にはいつでも、競争的産業が競争的状況の下で達成できる限りでの最低のコスト水準でもたらされる競争的価格と競争的産出量よりも、独占的産業が設する独占価格が必ずしも高くはなく、独占的産出量は必ずしも少なくはないのである。競争的な郵便乗合馬車群は真正に独

占的な郵便乗合馬車トラストよりも安い賃料でより多い旅客を運ぶことができるかも知れない。だがそれは鉄道が——それが真正に独占者であったとしても——完全競争的な郵便乗合馬車がなすであろうよりも高い賃料と少ない輸送サービスを供給するであろうことを導きはしない。アダム・スミスが「競争を狭くすることは常に公衆の利益に反するものでなければならない」、と言ったとすれば、彼は単純に妥当でなかった。・・・だが、我々が検討してきたように、鉄道は真正の独占者ではないのである。現代の製造工業の巨人達は更に一層にそうではない。

経済を機能において考察した場合にあっても、「完全競争のパターンに一致するシステムのもつ一つの特徴は社会的無駄のあらゆる源泉をもたない」、という我々自身の叙述は修正されなければならない。ひとたび我々が独占類似体の優越性——生産上の成果という点で完全に競争的な資本主義以上のものがあるということ——を認知するならば、二つの択一的システムのうちどちらがそれ自身の諸条件に内在する無駄からより大きく免れているか、という設問はその重要性を失う。とりわけ我々が、定常的均衡の中で発揮される比較上の徳性よりも、むしろ進化過程の中で如何になされるか、に関心をおくならばそうである。それにも拘わらず、完全競争的システムがいくつかの無駄の源泉から免れているとしても、それ自身の中に他の無駄を抱えていることを指摘しておく価値がある。

更に進んで免れている無駄は補償を伴う無駄であり、逆に悩まされている無駄は補償を伴わない無駄である場合もあり得る。このことは以前から注目されてきた純粋に競争的な過程についての近年の分析から十分に明らかにされた。一つの事例。独占類似体のもつ様々な硬直性由来の資源の無駄がどれ程に大きく見積もられようと、その持続的発展がどれ程に低く見積もられようと、後者の存在が全く否定されるのでなければ、そこには幾ばくかの補償がある。しかし完全競争による豚サイクルといったものに生じる無駄は補償にあたるものが何もない。即ち、何かの偶発事によって生じた有利な飼料・豚肉の価格関係が、豚生産の拡大を誘引し、それが一連の価格破壊をもたらし、更にその後に全養豚業者が生産を制限するとなると、そのように豚肉の高価格をもたらすことになり、今一つの支持し難い拡大を誘引する、といったこと。無駄は実際にある、だが、それ以外の何ものもない。

完全にまたは高度に競争的な諸産業——例えば小麦・綿花・生ゴムの生

産など——において、誰も要求しない状態の反復は、他の分野における硬直性の故にといった、もっともらしく付された根拠付けなど、事実無根のスローガンによって解明されるものではない。こうした反復に付帯した無駄は、それが急速な変化の過程として作動しなければならないとすれば、完全競争の分身または一部として受け取られなければならない。人々はいつも価格を引き上げんがために商品を破壊する措置に——もとよりあまりにも当然というだけのことであったが——衝撃を受けた。こうしたことは社会主義社会では起こり得ないだろう。資本主義社会でも、もし責任ある有能の政府がそうした状態を取り扱っていたならば発生する謂れはない。だがこの状態そのものが——人類の諸欲望を充たすであろう諸事物の実際の破壊とは関係がなかったとしても——無駄である。初期資本主義の時代にオランダの東インド商事会社がそのもとに運行されなければならなかった、そして競争を頭から排除していた諸条件を例とするならば、彼等の方策は数年前この国で起こった綿花・小麦・オレンジ類の廃棄がそうであったよりも遥かに無駄多きものであったとは確言できない。それは商人達が恐らくは利益を守ろうとしたものであり、そして近年の農産物の廃棄は単なる損失の防止、または減少であったことは疑いない。しかしその主たる差は、前者のケースでは崩壊が防がれた一方、後者のケースではそうしたやり方がその効果を経済の全体とその銀行制度を覆って広がる余地をもつ、というところにある。

(3) 資本主義システムの変質

摘要

1865年から1914年の間、一人当たり生産額を引き下げた国はなかった。過去の成果が反復され得ないだろうとなす謂れはないし、人口や土地資源といったものも、更には新しい技術的諸可能性もが投資機会の消滅の根拠とはなり得ないだろう。それにも拘わらず、資本主義の文明の持つ合理主義の精神は、超経験的な栄光を奪い去り、権利や義務或いは民主主義と社会主義につき新しい意味を授け、更には生活水準の向上の傍らに社会立法の意志と諸手段を創出する、といったことの諸探求に取り組んだ。それ以上に尚いくつかの局面に注意が払われるべきである。「所有と契約自由の制度」、これこそが真に私的な経済活動の表現であったのだが、それを後背へと押しやった。王権神授説とあわさったブルジョワジーによる財産権神授の信仰、そして労働市場における自由契約、これはすでに廃されてしまった。その上資本主義は前資本主義的型枠であったものを単に破壊し、自らを単に無防備である裸の状態であるにすぎなくした。更に進んで同じことを自分自身の型枠に加えることになる。資本主義過程における最も重要な変化は企業者機能の陳腐化の中にあり、それは経営管理の官僚制と自動化に根ざすものであり、大規模産業ではイノベーションそのものが小片に分割されたルーチンと化す。更にそうした変化の帰結として一種の定常状態に近い劣化状態に落ち込むこともありうる。それは資本主義社会の上層階層から利潤と同様社会的威信をも失わせることにもなる。このようにして資本主義の諸過程に及ぼす反作用は即ち敵意の雰囲気と社会主義へ向けての政治力学となる。・・・その他 (編者)

Ⅱ—(3)—1～23

資本主義システムの変質

1 この稿は尚「資本主義は生き残りうるや」であり、一個の序説を多分構成するものであった。だが、どこで？ 実際それは固有の輝ける論点であったのではなかったか、否。

王や僧正の合理化については、すでに十分に述べられている。・・・こうした分析は尚もっと後で重要となる。・・・すでに敵が養われていること、それに民主主義と社会主義が！ 更に社会立法の意志が！・・・形而上学は追い立てられている、といったこと。・・・義務の意識、人間性の改良・・・超経験的な魅力(superempirical glamor)は失われてしまっている。・・・しかしそうでないものがある。上部構造として感じられている不平等性。・・・能率とサービス・・・イデオロギーの後光・・・平和主義といったこと・・・

恐らくここで新しい部分が・・・そこで尚大量の組み替えが・・・集約もまた疑問である・・・恐らくこれらは二つに区分され、且つその間に押し込められるものがある。すなわち経済的な機会と無駄といったこと、・・・社会心理的過程がここにその成功を表出するものとして来る、ということ。・・・

2 機構 A の分析から観察されたファクト B につき、A から B がもたらされたかも知れないと知ったとしても、我々は A が B を生み出したと完全な確信を以て結論することはできない。・・・推論としてさえ他のありうべき諸原因に対する研究を待たなければならない。それは実験科学と区別される観察科学が抱える呪いである。・・・だからして・・・

1914年に先立つ半世紀の資本主義の発展を対象として、モノポロイドのもった動機的諸力が産出の瞠目するべき増大に適合的であったこと、及びそうであり得べくもなかったことを示そうとする諸行論が不適當であったこと、これを我々が尤もらしく示し得たとしても、その提示は経済的研究上の諸条件の中にある論証——それはモノポロイドの資本主義が

現実にテストを成し遂げている——に過ぎず、これに替えて資すものでなければならぬ種類のものの論証乃至は推論は組み込まれていない範囲での提示なのである。いくらかの他の要素がそれに対して責任を負うものであるかも知れないのである。更にその画期をとおして、資本主義はそうした諸要素の作用に対しては——資本主義のメカニズムを通す以外には——もはや、余地がないほどに完全に行き渡った、という理由から一個の設問が再構築されるべきである。ただしそれが我々の問題を解くかどうか？

3 しかし経営の官僚制化と心的構造の問題、所有と経営の分離の問題はどこで・・・ここではできる限り要約すること。更にこれらの進歩の諸形態が——重要な諸関係の中で——必然的(そして当然のことながら社会主義のための重要な前提)であることを認識するや直ちに、それを規制したり機能を反転したりすることは理論的にも何の根拠ももたないということ。反対理由だけでなく逆にそれに賛成となる根拠をも！・・・それでもそれは恐らくは結論的命題の助けになるだろう。・・・

4 次いで社会と人口が扱われなければならない。・・・続いて a) 装置は効率的であることをより少なからしめられるのではないか、 b) 何か(etwas)を止めることを強いられているのではないか、を扱うことである・・・資本主義はこれらの諸可能性を利用し尽くす方法である、ということ・・・

人口の増加、独立的なものか、または従属的なものか。・・・より多くの出産・・・魅力ある賃金・・・アイルランド人・・・資本と大衆の移民・・・技術進歩——人口の増加、人口の増加——資本主義がそれをもたらす諸国・・・

10/1の戦争、軍備・・・自由——使い尽くされてはいないが非常に生産的・・・新開諸国は産出があれば、さほど巨大でなかったとしても、その上に利潤を提供した！・・・だが二つの事柄・・・a) 資本主義対他の要素、b) 資本主義は他の要素によって更に推し進められる。・・・更に

それはどんな結果を導いてもよかった、1914年より前の(?)の場合であったとしても。

5 人口趨勢における回復は可能ではない。・・・a) その数が到達された故に、b) 留保された時間・・・原材料 a) 不足による圧力、b) 課題としての原材料生産の発展・・・婦人のエネルギーが解放せられた(それはより後の世代において、より長時間の労働についての諸条件に対して重要)。

6 その成果(performance)が反復されることはあり得ないような過去の成果が、資本主義の故であるのかないのかを今問うほどに、機会はありきたりのものではあり得ない。・・・それが投資に取り付けられることはすでに述べた。・・・19世紀に一人当たりの生産高を減少させたどんな国もなかったのでは。・・・

貯蓄は自己適応をなすであろう。・・・

需要側と供給側からの投資機会の減少・・・ここで私はより多い人々はより多くを作り出すと述べた。・・・更に一人当たりの産出をも？・・・それは尚決定的ではない。・・・子供がない時は貯蓄は少なくなる。・・・漸減的収益・・・極めて資本消費的な財、余暇・・・この他老人達が保持するであろう余暇。・・・但し徴候として、そして原因として。・・・

7 「十分に考慮される！」・・・このようにして飽食——生産——政策については何が。・・・そして私は過去の成果だけを描くだろうと述べた。・・・遅滞や漸減などはそれでも始めて取り上げる。・・・控え目だが質においても留意する。・・・ブルジョワ階級にそれは負っている、ということはどこで。・・・長期的諸潮流についても確かに・・・課税といったことや失業についても確かに・・・一挙に・・・

その成果が一層危険なものであるものに依存し過ぎるようなこと、あるいは所詮は一つの行論であるようなこと、あるいはそれが決定的なものではないようなこと、は本来どこで。．．．そのように失業はすでに．．．そうした結果についての私の即席の論評は私が漸減的な人口増加を適切に認知しない場合にのみ行う。．．．

8 成果が資本主義に帰属するや否やの設問に対する論議の中には、独立ではない要因としての政治について再びはっきりと。．．．

エンジンの区分．．．人間と材料．．．人口問題のインセンティブとしての、それはそれとしての追加．．．同様に、土地問題はすでに片付けられ、飽食(及び諸政策)はもっと後で片付くこととなる。

9 一つの大きな困難、それに人気のある諸行論．．．消費者の瞞着のあること．．．かくして三つの事柄を以てする比較と a) 可能性、b) 利用し尽くすこと．．．資本主義は資本価値の保全の上にもみ運行するということ．．．他の計算．．．法律家——相談料を取り続ける——による節約、しかしその他の点では——そしてトップの報酬の削減は大きなものではない。．．．生活の息吹きとしての不平等．．．人間の人間による搾取．．．事業家達は幸運な馬鹿者達であり、しかも過激派である。．．．有閑の人々は集中しており、しかもゆったりとした気質があるが、一様に本物であることが少ない。そしてこの中において彼は出費することができ、また有意味な金持ちなのである。

1) ——、2) 消滅——怠惰性は悪くない、3) 怠惰な金持ち(idle rich)によってなされる仕事、人に対する資本主義的な方法、政治といったこと、4) 動機、5) 節約．．．仕事と貯蓄に対する動機．．．怠惰な金持ちの中に登場する。．．．(怠惰については何が．．．イギリス)．．．家族についての考慮．．．

10 何故により少ない投資とより多い消費に対する適応はないの

か?・・・しかしそれでもそれは投資を意味するものであろうが——但しその幅が。・・・リカードは、その上にどんな恐慌理論も構築できない、ということを知っていたというべきであらうか。・・・

- 1 1 1) 企業執行部における職業心理上の枯渇の契機(他の事柄等も多分に悲観的見通しを正当化する諸環境の下にある)・・・
 - 2) 原料と食料は未だ稀少ではないし、圧力を行使してもいない。それに他の原料も存在しており、古い部分がよく用い尽くされている——石炭も——という状態にある。そこで他の生産への投資だけが問題になり得ること——入植地と新しいセンターの創出。
 - 3) 新しい状況への適応・・・
 - 4) 投資——資本の吸収——・・・
-

1 2 古き時代の個人的な——真に「私的」な——経済的諸活動の諸ニーズと諸方法を表現し、しかも個々の経済的イニシアティブを纏っていたものであるような、全てのそうした諸制度、とりわけ財産と契約のための諸制度を資本主義過程は背後に押しやることになる。それはすでに労働市場における自由契約制度を廃止してしまっている。そのように廃止しない場合にあっても、それは現存する法制的諸構成——例えば個人企業や合資会社に対応する法制的諸構成に対立するものとしての株式会社の法制的諸構成——のもつ相対的重要性を移動、乃至はずらすことによって、あるいはそれらの内容や含意を変えることによって、同じ目的を達成することになる。

アナロジーがある。民法典(civil codes)をもつところ、並びにそれをもたない多くの国々において、尚、妻に対する「愛情・貞節・服従」(“love, honor, and obey”)の要請の法(law)が存在している。恐らく語句を逆さにしても意味するところはさほど変わらないであらう。私は信じないのであるが、服従とは第一義的に夫の機能であることが常であったとする一束の語句を私はもつ。それにも拘わらず、それは何事か——とりわけある程度に強要させることができる何事か——を意味している。語句は尚、いまだ存在している。しかし明確な法制的義務を問うものである限り、そ

の含意は過去のものなのである。

13 オーナー企業者の伝統は尚残っている。・・・作用は婦人参政を唱える女達(suffragettes)を怒らせる。・・・ここでは生産についてはすでに述べられていることが忘れられてはならない。・・・私はその上にある合理化について、いまだ語っていないのではないか？・・・再び家なるものは子供なき場合には望ましくなく、子供は家なき場合には望ましくない、という相互作用があること。・・・それら全てが社会主義に向けての得点(point)になっている、ことは忘れられるべきでない。・・・しかし尚、さほどに幅広くには前進させられてはいない。・・・非常に幅広くではないが、力強く進んできている。・・・ほとんど不可避・・・暴力・・・それは健康な力ではない。・・・19世紀における婦人参政はどこで、そして私は家への反作用をも言及するべきである。・・・英雄的な適応・・・大学はタイプライターの中で擦り切れている。・・・社交(上層階層の)生活・・・バランスの欠如・・・近代的人間の一般的な破壊・・・現代の戯画・・・融合を伴う・・・

14 このようにして経済的崩壊がないだけでは、尚また、不満足であること、が先ずは示される。・・・そこでそれは破壊する。

- a) 企業者は重要でなくなる(経営管理もまた)——官僚制化、機構化・・・
- b) 合理化
- c) 生産と消費におけるブルジョワジーの慣習・・・家族制度、人口(乃至は人口を増すこと)・・・
- d) 他の人々の態度(Habitus)・・・
- e) 敵意——自信喪失(nicht-an-sich-selbst-glauben)
経済における集中——プロテスタントの倫理・・・封建的宗教・・・意味付け・・・

雰囲気、すなわち歯車の下に来るような破碎！競争の下で落伍していく。・・・農民達は騎士により指導される。・・・人々は彼等の階級の成就(業績)の下で健康なプライドを失う。・・・防衛される場での臨終的な防衛そのもの・・・

1 5 資本主義と社会政策

- 1) 社会立法は資本主義の成功を前提としている、そして一人当たり 2100 で何ができるかである。
- 2) 失業、高齢者と病疾者、教育、衛生・・・自由財・・・
- 3) そこで、あらゆるこうした合理主義者的な諸々の物事・・・日常生活の合理化、国王と法王・・・大衆は叫び、または彼等の鎖をがちやがちやさせる・・・経済のファイナンスについてはすでに・・・民主主義・・・
- 4) 社会立法は単純に押し付けられるものではなくして、「意志」一元論 (“will”monoism) といったものを超えて育て上げられる。(それは反復あるいは自明の矛盾でない)・・・

21-23 は後の行論とよく相関していない、フェミニズム、非英雄的平和主義、国際的道義性もそうである。

* 1)、における 2100 per head の単位はドル。・・・21-23 は本稿でのパセージの番号とは関係がない。・・・(編者)

1 6 国家は何物をも創出しない、という。・・・その一方で独占についてはぐちゃぐちゃ言うが、節約といったことには何も言わない。・・・そしてトラスト化した資本主義の下では諸条件は競争的企業者と競争的大企業に抗するものではない。・・・

私が社会主義に大きなヴィジョンを認めるとすれば、次の条件下でなければならない。

- 1) 企業者は偏にその業績成就を以て十二分である。(Der Unternehmer macht sich selbst überflüssig durch bloszes achievement.)・・・いくつかの問題は解決されており、解決の方法は知られている(計算と計算機構)・・・加えて指導機関の官僚制的で機構化された履行がある。・・・それは企業行動とのつながりを引き裂くもの(専門家達)であり、民主化を進めるものである(高揚が更に一層に可能ですらある)・・・安全狂・・・

2) 家族制度がその支持要素を摩耗させられる。・・・家庭の館の外で生活することが大幅に容易化する。・・・動機と生活形態・・・人口論的考察・・・出生率の低下は解明されている、a) 福祉理論と合理化によって(但しこの合理化は含意である摩耗とは何か別のものをもっているのでは?) b) 家庭の摩耗(Zerstören des Heims)によって。・・・合理主義的性格とその達成について・・・複式簿記はその合理主義的標語を誇張してはいない。・・・経済的合理性への集中といったものはもはやない。

3) 敵意——知識人達・・・ブルジョワ的信念の喪失、それ自体・・・ブルジョワジー世界は批判が激しいほど益々優しく処遇する。・・・権利意識は原因というよりも結果である。・・・単純に道徳的に非難する、本質的には資本主義に対する非難である。・・・不平等、利潤、搾取に対する・・・

17 現代の資本主義的「独占」の世界からは、不在であると想定されているあらゆる種類の諸徳性。この行論の中では扱われることがほとんどなかったか、または全くなかったところのもの、即ち、大規模企業の「諸悪」なるものは多分に想像上のもの——累増していく悲惨と専制についてのマルクスの図式程これに過ぎたものはない——であること、等々は過度に反復されることはできない。しかし想像上のものであろうとなかろうと、そうしたことが論点ではない。集中の社会的な諸帰結は、たとえ管理の大規模単位が天国にいる天使達から拍手を引き出すが如く作動したとしても、同じことであろう。資本主義は尚、攻撃を為しつつある、と。・・・

世論調査での解説の意識構造(Mentalität)・・・競争的で社会主義的な諸々の投票の解説・・・一層に手厳しく投票する、そして財産や契約については尚も鋭敏である。・・・このようにして、その限りで、自ら立脚できるのでは。・・・且つ、これらはあらゆる意識構造から湧出する、一小市民、たった一人の資本家。・・・合衆国を見よ。・・・労働者が残っている、そう早くには登場しない。・・・農民だけが残っている。

そこで意味合いの変化が・・・それだから規制の変化が・・・変換・・・私的所有はかくして生産の中では死に絶える。・・・諸家族の中にある長期的視点・・・家族とマルサス主義・・・消費的所有・・・家族的動機・・・婦人達は何を考えなければならないのか?・・・合理化された世界・・・

農民達、合理的な忠誠・・・

政治的なものだけが問題でなく、資産の生々しさもまた、それは資本主義の中に死に絶える。・・・

- 1) これは、そこで、我々の諸公準へと導く。・・・
- 2) だがヴィジョンはすぐさま社会主義へ向けての運動となる。・・・
- 3) それは非常に長々としている。・・・
- 4) あり得べき様々な修正、ファシズム・・・

18 貯蓄と投資・・・だが利潤率は・・・不可避的である・・・政策・・・構図・・・事物が統計的にではなく考えられていることについては言うまでもなく配慮する・・・剰余価値の消滅・・・末尾には社会主義のゴールをおくことは避け得ない。・・・帝国主義、ナチズム・・・臣民のみの統治・・・若い人・・・連結している。

$$C+V+m=W=C_1+V_1+m_1+2C_1+V_1/2+m_1/2$$
$$=3C_1+3V_1/2+3m_1/2$$

マルクス主義者によるデータ解明と資本実態・・・若い人には——新聞のリアリティ、または労働者の下にあるような、そうした何事かが・・・議論に従って・・・渴望・・・見せかけの検証・・・低落する利潤率と集中・・・

19 資本輸出、植民、帝国主義、そして戦争(ナショナリズムのそれではない)についてはすでに・・・いくらかの留意が必要であろう。・・・ブルジョワジーの帝国主義に対する位置関係・・・幅のあるフレーズ、社会主義は企業群に対し味方するものではない。・・・私は無責任性についてのこの弁護に苦しめられてきた。・・・大学教師は自制の行為に自らを閉じこもらせることだけが唯一の機能である。・・・永久革命についてのトロッキーの理論・・・時の充分性について事態がそこで願望される、

1905年革命時のカウッキー・・・

20 独裁者達——自由、彼等はこれを容認しない。・・・承認されて与えられた目的なしに自由が制限されることはあり得ない。・・・ブルジョワジーはそうする意思をもたないし、且つそうすることができない。

諸手段、大規模産業、そして顧客(パトロン)の性質の変化——拡大(解積)・・・大量生産の結果・・・烙印(刻印)、充満した怠惰、合理的市民にはできない・・・彼等は自分達はできると考える。・・・教育——失業、読書人口・・・他の諸前提を満たしていない人々から、及びそれらを悪く満たしている人々から漂流してくる。・・・

独立は攻撃によってのみ・・・政治、官僚(制)——増大しつつある仕事・・・教授——トレーニング・・・実務家——仕事・・・といった区別。・・・思わせぶること自体は許される。・・・集团的利益と集团的攻撃・・・攻撃の必要性・・・力強い地盤と足取りによってのみ・・・メンタリティもまた・・・

21 この脱線からもとに戻って、我々は今ちょうど論じつつあることよりも、ことの不吉さにおいては劣らない一組の諸事実に直面する。私が以前述べたように、資本主義が封建制起源の制度的枠組みに対して行使したところのもの、それが自分自身のそれに行使されるということである。これを明らかにするためには、我々の道程の幾ばくかの先行的展開を振り返ってみるだけが必要である。と言うのは双方の結果は・・・からの結果だからである。・・・

そうではない。三段階論そのものではない。そして、資本主義は機構的——経済的に死の行程を歩むのではない、ということが重要なのである。巨大企業は新しい封建制度でなく、経済的デッドロックを意味しない。・・・競争の排除は他のやり方でそれに置き換えられるような意味、または重要性をもたない。しかし、a) それがおの場合反転して現実に資本主義の運行を遅延させ、しかもそれに替えて現実に社会主義的になると

いうこと、

b) その全過程は長引くものであり、しかも尚その範囲が見えないということ、それらがそこに現れてくることが社会心理的にも政治的にも、本当に重要なのである。・・・

サラリーマン経営者はその後にくる。・・・しかしそれはすでに前以てきているのではないか？・・・体制、研究、絶え間のない計画・・・我々の設問に対する回答を完成する。・・・

2 2 静態的資本主義(stationary capitalism)というのは言葉の矛盾である。資本主義の上級階層は、もし経済変化、乃至は進化が停止するか、または完全に自動化するかであるならば、報酬を生むことを止めるであろうような諸源泉に浸って生きているのである。資本主義企業は——その著しい業績により——これらの諸結果の双方、あるいは少なくとも第二のもの(自動化)を生み出す傾向をもつものであるから、それ自身の成功により自らをいやが上にも繁栄させる傍ら、それ自身の成功の下でバラバラな小片に分裂するという傾向をもつ、と我々は結論するのである。

そうした傾向の下、完全に官僚制化された巨大産業単位は小規模と中規模の企業を排除し、その所有者を「収奪」する傾向がある。帰するところそれはまた企業家達を排除し、一つの階級としてのブルジョワジーを収奪する、というところが一層に重要である。社会主義の真のペース・メーカーは、それを説く知識人達やアジテーター達ではなくして、バンダービルト、カーネギー、ロックフェラーなのである。この結論は、あらゆる点でマルクス風の社会主義者の好みに合わないだろう。もっとポピュラーな(マルクスはこれを俗流と言っただろう)社会主義者達の叙述の好みには、合うところが尚少ないだろう。しかし予見が進行している限りでは、それは彼等の歩みと異ならないのである。

我々が資本主義過程の自分自身に及ぼす諸効果を考察しつつある限り、その効果は資本主義社会の上層階級の経済的基礎を超え、彼等の社会的ポジションにまで拡大するよう見られる。諸利潤、利子及びそうしたもの、それに経済学者は準地代をもつけ加えよう、等に由来する所得に併せて、資本主義過程は遂にはこうした階層の持つ社会的威信をも破壊するであ

ろう、ということ。そしてこの平行性は次のような些細なことに主に根ざすものではない。一人の所得の喪失は当然のこととしてその人の社会的地位を損傷する——それはもとより真実ではあるが全く第二次的な事柄である。ではなくして双方の現象が同じ原因の帰結、即ちブルジョワジーはその経済的ポジションとその社会的ポジションを——それが帰するところその経済的機能を失わせるであろうが故に——失いつつあるのだ、という点に根ざすものである。

23 資本主義が前資本主義にあったところのものを破壊するだけであつたとしてさえも、自らは裸にされるのではないか——成り行きに任せではなく必ず——ということを我々は検討している。・・・資本主義は先行者の構築したものだけを破壊し、そして何か自らが保持していこうとするものを取り揃えるといったようにはではない。・・・所有に対する合理的行論は君主制に対するそれのようには効力がない。・・・1)財産、競争、放任・・・合理的根拠に立脚した制度なるものはあり得ない。・・・2)諸態度と諸政策・・・3)反作用、それはそこでは攻撃に向けられよう・・・封建制度・・・それは過激派右翼である。・・・資本主義はそれ自身の枠組みに同じことを為す。・・・だが自らをも破壊する。そして同じ過程に即して、我々は完全に同じ足取りを反復できるかも知れない。

そこで敵意と政治——それらはそこで反作用する。・・・課税や干渉などではない・・・もはや自分のもてるもので好きなようになすことはできない。・・・新しい親方、だが敵対者、・・・我々は我々の親方を啓発しなければならぬ。愛想よく受け入れる、だがそれは得るところが何もない。・・・生活水準と余暇はもはや一つの原因に過ぎない。・・・世の中で残されているものは何か；財産神聖権は王達の神聖権と共に出ていく——ブルジョワジーが他のように信じていることは明らかだが。・・・アメリカ人もまた、そして150年に渡って実際にそうである。・・・政治制度・・・

明らかに、現実にあらゆる良質の頭脳が望んでいないとしても、ブルジョワ階級自体は合理化につき言われているものに配慮をなす。
a) 家族、家族家庭、家族企業・・・既述のこととⅢに指示・・・義務と過程の構図・・・b) 宗教、動機、・・・ブルジョワ急進主義・・・何故の責任かについてはこれ以上答えるものはない、安全・・・c) 主人

(Herrengefühl)感情の欠如・・・犯罪者の不承認のないこと・・・お気に
なさらぬのなら、どうぞ・・・知識人達、ブルジョワジー達が産み落
とした・・・意志は知性の後に死す(Wille stirbt apres nous)・・・ビジ
ネス事情は尚、感知される、但し長期に・・・貯蓄と貨幣・・・功利主義
(utilitarianism)の毒素・・・芸術の(?)・・・

敵対的世界であるだけではない・・・ブルジョワジーがこれと闘うこ
とを配慮していない敵対的世界でもある、だがそれについてはⅢにおいて
どのみち・・・更にそれが社会主義への論点であることは(1)において既
に多く述べた。——重要なテーマである！ だが過程は長々としている。
・・・進化と革命についてのテーマの取り扱いに配意(その誤りはすで
にここでは明らか)・・・保守主義・・・尚それほど広範にではない・・・
組み替えの種類についての短い考察を・・・

過程における反作用・・・民主主義と資本主義についてはどこで・・・
そこでは、人々は自ら赴くに任せられる、非制度の制度——社会的レッセ
フェール・・・競争、私的所有、民主主義、自由放任・・・方法・・・
新しい諸道徳へ・・・正に基本が消え去る、利潤と蓄積、そして不平等
と貯蓄・・・知識人達、そして恐らくは尚、最後に次のように告げるこ
とになる、帰結はそこで社会主義者のそれと同様であると・・・

(4) 資本主義システムの死を招来させるに至る自壊的体内疾患

摘要

企業者機能はその重要性を失っていきつつある。更に官僚制化した経営管理への適応はサラリーマン経営者を生み出す。そうすると資産に対する十分に血の通った諸権利といったものは既に消滅させられていることとなる。資本家階級全体のため闘おうとする意志などはない。諸価値と諸標準についてのブルジョワ的図式を保持しようとする限り非難の対象となることは確かである。ブルジョワジーの陣営は反対して結集する社会的諸勢力と対峙するには悪く装備されており、民主主義の諸方法で闘うことが出来ず、その諸利益を保護するための法的諸装置を次から次へとねじ取られていく。資本主義は経済的・合理的な諸批判には強いが、その背後で駆動する特殊合理的な諸批判に弱い。更にその上、資本主義下では知識人層が生み出され、それ自身を社会的不安の中に利益が授けられた今一つの亜種に進化させられていく。即ち、大衆——彼等は不安定性の砂漠の中へ信ずべき何物かを熱望しながらも、イデオロギー的リーダーを欠いたまま追いやられている——の中であって、ブルジョワジー社会の持つ知性には密接に結び付けられながらも、他方でその何物かに対応して反ブルジョワジー的でその不満の食客となるべきであって当然であるような知識人がある。資本主義と資本主義の利益に反対する敵対の雰囲気、更に自らの出自であるブルジョワジー陣営への斟酌を拒否するような敵対的立法をもたらす不満の上部構造の構築がある。最後にブルジョワジー家族の解体と資本主義的動機乃至は望ましさの蒸散、古きブルジョワジー家族の中にあるものから現代の分離された個人の中にあるものへの自己利益の概念の変化、快樂主義的要素を含んだ功利主義をもってする生活の諸形態、短期的展望をもってする手前勝手な態度がある。・・・その他 (編者)

資本主義システムの死を招来させるに至る自壊的体内疾患

1 資本主義の過程は、それ自身の立役者達や彼等と結合する社会階級をして、その防衛機構を崩壊させ、その陣地の守備隊を追い払わせ、その表象となるであろう諸態度と諸利益を破壊させる、ということを過剰と言え程になさしめる傾向があるだけでなく、私が入口のところで触れておいたような自分自身に対する敵対の雰囲気を生み出す。このことは更なるコメントがなくとも導かれるものではあるが、その敵対の雰囲気の理論は——この問題の重要性とそのパラドキシカルな性質の故に——明示的に発展させられることが望ましい。但し通常なされているようなやり方では、マルクス主義者流儀のものは明らかに誤っているし、だからと言って更によく知られている方法もフロイト流心理学の技術的意味での合理化以外の何物でもないのであって、これをなし得ないように我々には見受けられるのである。

2 そこから始められるべき基本的命題。結社なりグループなりは、その結社やグループの利害をよくわきまえて、合理的に演じられたものとして行動する(act)、あるいはもっと一般化して、振る舞う(behave)ことは決してないということ。人々は大衆の状態で感じ、考え、異常合理的に(extra-rationally)に振る舞う。あるいはパレート(Pareto)が示しているように、振る舞いの大部分は、慣れとなって引き継がれており、且つ制度的に叩き込まれて生きながらえている、といった風にセットされた忠誠心や信条に従って没論理的にそうするのである。自分自身の法と合理的配慮に従って変わりはするが、そうしたものの出現と退廃の中に課される役割は少数派的な役割を演じるに過ぎない。この命題は——我々の道程の多くの転換点で我々を助けることになるが——社会的世界についての現代的視野と18世紀から19世紀の初頭にみられた哲学的急進派の視野の間にある「あらゆるその最も重要な差」を包攝する。

我々は盗んだり殺したりはしない。その理由は——よく定義された利害と動機に照らした——合理的考慮から、我々はそうするべきではない、という論理的結論に至るからであるが、同時に我々の道徳的慣習がそうした

意思決定を我々の選択可能な図式から排除してしまうからでもある。我々は慣習的に受け入れるようなやり方で突きつけられた命令に盲従はしない。その理由は我々がそれぞれのケースにおいて個人的なあるいはその種の命令に従うことの合理性を認識するからであるが、同時に我々は極めて本能的に、且つ十分に意識的な熟慮なしにそうするからでもある。我々は日々の仕事を仕上げていく。それは、我々の個人的、乃至はグループ的な利害関係、あるいは我々の仕事が一要素となっている社会的配列の賢明性といったものの論理的知覚からでなく、単純にそれが義務だと言われることをなそうとする理屈抜きの性向からそれをなすのである。我々は婦人に出会った時帽子を脱ぐのは、そうすることに何等かの特別の理由をもつからではない。——以上ほとんどの場合、我々はその行為に気付きさえもしない。

3 もし何等かの「論理」が全てのそうしたことに入り込んでくるとしても、そうした論理は踏み固められた道を巡視するような社会的承認——電気椅子に肩をすぼめるような、誰にも厳格に適用される語義での逸脱した振る舞いの社会的不承認——の認知を超えて進むものではない。しかしながら、これらの社会的承認または不承認は、振る舞いに対する独立した規制装置であるのではなく、社会的標準に対する認可されざる応諾 (*unsanctioned conformity*) となるようなものと同じ源泉から流出するものであることを付け加えたい。例えば刑法典はひとたび制定されるや、それ自身の中にいくばくかの生命を獲得するが、基本的にはそれはただ道徳的慣習を形に整えさせただけのものであり、その効力は第一義的にこの事実を負う。すなわち、法治がその社会の道徳的意味付けによっては承認されないルールを課す時はいつでも、国家の禁止に対するこの国の——アメリカでの——反作用が古典的事例であるような諸現象を我々はいつも観察する。

4 今一つの我々が必要とする基本的命題がある。それは資本主義過程は本質的に合理主義者の文明だということである。このことを我々はすでに確認した。私がそこでなすべきは手中の問題に担わされるものを規定するだけでよい。但し資本主義の文明が合理的なものであると言うにあたって、

人間行為の異常合理的な決定諸要素(extra-rational determinants)が当該文明の機能発揮に重要ではないという含蓄であるとは意味してはいない。アダム・スミスのタイプの経済学の古典によってはそれが過度に強調されたと思われるが、生産の資本主義システムが個人主義的合理性を——個々の自己利益と同様に——そのもてる全ての程度と方法において社会的サービスに作動させたことは真実である。我々がすでにみたように、合理的態度と合理的批判精神が経済の分野から生活の全ての他の領域に拡げられたことも真実である。

しかし、異常合理的な規律の重要性——そのシステムの基本的与件を構成する特定の制度的諸要素について、これを暗黙裡に受け入れることと、これに詮索抜きで順応することの重要性——はその場合、損傷されはしないのである。それ故に合理的態度が拡げられることは、そのエンジンの滑らかな走行に干渉することになる。王達と貴族たちと僧正達が超合理的な魅力(hyper-rational glamor)の保護衣を脱がせられることにもなれば、そして彼等がもつこともあり得よう、そうした功利主義者的諸利点に立脚させられるや、同一の過程が——ブルジョワジー達の苦行へ向けて——私有財産制の尊厳とそれに付帯した多くのことの上に運転していくことに対して起こるのである。このことの全てが今や研究対象であり、そして功利主義者的信認状を示すことが求められるということとなる。

5 資本主義の過程は直接的にそれ自身の基礎条件に侵襲を加える。徐々なる前資本主義的並びに資本主義的諸機能の消滅と資本主義の生き残りに都合の良いような制度的機構の担い手であり、しかも保護者であった諸グループの双方の消滅によって。それだけでなく間接的には超合理的にもちきたられた忠誠心を破壊することによって侵襲を加える。以前このフレーズを用いた時の意味に追加されている意味において、資本主義の秩序は無防備の審問に立たされる。

6 我々は当面、資本家の中枢——あらゆる重要性を集中した中枢——である家族が解体しつつある事実に向けよう。しかし、これとは全く独立して、家族的動機と、とりわけその最高の形態——産業的、

または金融的王朝を創出するという野望——が多くの場合、単にその野望を充たすことの不可能性ということの故を以て死に絶えなければならないだろうということを我々は検討している。・・・であることの、かの「防ぎ難さ」と、かの「敵意」が・・・

更にそれ以上に、ブルジョワジーの振る舞いがその「防ぎ難さ」——読者がこの言葉に付している我々の行論の特別の意味付けを心に留めておいてくれること、及びその中に異なる何事かに解釈することのないように、私は望む——とその「敵意」——その様々な原因について私は描写を試みてきた——によって変化しつつあるのである。いくつかの国々で、またいくつかの時代で、ブルジョワジーは単純に歯車にはめ込まれたと感じており、あらゆる国とあらゆる時代でその感覚が自信を失わせている。国々の事業家が自分達の諸価値の図式とブルジョワジー世界の諸標準に自分自身を保とうとする限り、彼は——極めて限られた仲間の外側では、そして自分達の集団的利益のプロフェッショナルな防衛者の間においてさえ——自分達が非難と軽侮の対象であることを露呈するのである。如何にこの麻痺作用が事業活動にさえ及んでいるかは稀にしか認識されない。しかしこの要素が政治的あるいは他の階級的諸活動を麻痺させることが如何に由々しいものであるかについて理解するのは困難でない、と我々はなすべきであろう。ブルジョワジーは単に感じるだけでなく、自分達に反対して結集する社会的諸勢力に対して立ち向かう能力がないのであり、しかも民主主義というブルジョワ的理念の立場から利用できる諸手段を以て彼等と闘うことができないのである。ブルジョワジーからその利益を保護するため用いられてきた法制的措置を次から次へとねじり取り、しかも物事についてのブルジョワ的図式の立場からすれば、すでに確立されてある秩序に向けられた攻撃であると疑いもなくみられるものを制度化する、といったことが極めて容易に検証されるのである。

7 非ブルジョワ的立法に関連して、敵意と政治につき以前から言われてきたことと容易に衝突することはありうる。・・・重要な観察・・・このようにして、私は雇用者に対してではないが、チャンスは彼にはもはやないことを語るべきかも知れないし、あるいはまた独立した社会的権力であることを必要とし、一階級の側にそれは立つことは許されないとする裁判の社会学についても語るべきかも知れない。

8 しかし実際にそう尋ねられているのであるが、次のように尋ねられることは大いにあり得よう。すなわち、社会のあらゆる階層に伍して自分の義務を果たしつつある、と真面目に感じているような数多くの工業家によって——ナイーブな困惑の下に——「何故に資本主義は旗を翻した堂々たる試みの中から来ることはできないのか？」と。これまでになされた我々自身の行論はそれが功利主義者としての信認状を示すことに満ちていると十分に指摘しているのではなかったか？ そのため指摘されてよいような完全に良いケースはあり得ないのか？ その上で、かの工業家は次のように指摘することは間違いない。「ある分別ある労働者は、自分の企業との——言うなれば巨大製鋼所か自動車企業との——契約のバランスシートを検した上で、全ての点を考慮した結果として、自分はそれほど悪くなく働いており、しかもこの契約の利益は全て一方的なものではない、という結論に至ることは大いにあり得るのではないか？」と。——確かにそうである、ただ全く無関係であるだけである。・・・それらは合理的な行論である。それらは経済的理由にアピールしただけである。それらは批判の合理的な先鋒とは闘い得るのであるが、しかしその背後で駆動し続ける異常合理的な諸力とは闘い得ないのである。だとすれば、それ故にこうした功利主義者的根拠は武器としては「打撃力を欠いた」(sine ictus)ものであり、人間活動の原動力としては弱いということである。人々及び彼等が感じ、そして振る舞う彼等の様々なやり方を以てするほんの僅かでしかない経験もが、それは情熱を上回る支配力ではないのであり、行為の異常合理的な決定諸要素に対する代替要素にはならない、ということを示すことで充分となすべきである。

9 挙句の果てに資本主義社会は——それ自身を打倒するため必要とされるあらゆる諸要素を提供することに加えて——更に知識人階級をしてそうした諸要素を社会的にその諸可能性を発展させるべく育ませ、彼等にもものをはっきりと言わせ、更にそれらをオーガナイズすることを助けさせる能力と意志を持つよう進化させる。そうすることによって授与された利益とは別の亜種、社会的不安の中に授与せられる利益を知識人は自らのために創出するのである。この現象は、見物人にとっては地滑り的な過程の

不可避性をもつ何事かを獲得してきていると見られるほどに、ブルジョワジー社会のもつほとんどの基本的特性のいくつかと密接に結びつけられている。「知性」の中にその——従って不可避的な——確信を備えたものであるブルジョワジー社会は、そうしたタイプを生み出すことを助けるなどにはあり得なかったし、更にそれを失業——及び多分ブルジョワ的生活の通常の歩行の中での使い道のなさ(unemploymentability)——と呼ばれるほどの量において生み出すことを助けるなどにはあり得なかった。しかしその傍らで、その同じ時代において、資本家的世界は——今や明らかにされるべき諸理由によって——それ自身極めて無能であること、そして時折、子供じみた訓練主義者(disciplinarian)であることを証したのである。

しかしブルジョワジー社会は——自ら考案したもののため全てのものを棄てるという、ある種の自由の中にその特徴的な信条を備えていて——大衆をイデオロギー的にはその文化的唯物論の荒涼たる砂漠の中に(in the dreary desert of its cultural materialism)、指導者もなく放置すべきであった、信じ、且つ尊敬すべき何物かを熱望しながらも、ということもまた避け得なかったのである。この何物かが反ブルジョワジー的なものであるべきだったということ、及びそれは反抗に糧を求むべきものであったということ、そうしたことは、それが次のことだと知れば容易に了解される。すなわち、知的デミウルグ(the intellectual demiurge)とそうした好機会は相互的に見出される筈であり、しかも前者は通常知識人の出自であるブルジョワジーの陣営に反対する側に反転する筈である、という条理が作用する。知識人は尚、ある役割を演じるであろう、そしてもっと詳しい理論が一個の位置を求めている。

* デミウルグ(demiurge) : プラトンが考えた世界の創造者、最高神の次の神で、しばしば悪の始祖とされる、支配力の意もある。(編者)

10 知識人を後に従わせること、それはあらゆるヨーロッパ政府によって実際に行われ大よ19世紀の中葉まで続いた。・・・

資本主義の道徳性について・・・不満足を隠すこと——人々がそれを了解した時に破局が。・・・

1 1 ウィルケス(Wilkes) . . .

どんなそうした試みもが——それは基本的には罰金刑に相当するものだとする——ブルジョワ的意識に逆らって犯人達を保護するところのいくつかの私的諸要塞に行き合わせた。 . . .

安価な出版——校正過程の新しい特色 . . . 究極的に十分な自由と知識人達の創出 . . . 態度において批判的 . . . ヴォルテールのように . . . もはや宗教ではない . . . コンセンサスと制度 . . . 栄誉の諸気質に歯向った場の外での自由(freedom ausser wo gegen Humors of honer) . . .

知識人達は更に利害について語った。しかし彼等の集団利益は政治的世界について語られることができることでもあった。それは同じことであった。 . . .

a) しばしば労働者はストライキを図る、b) しかしできない、それ故は世論の支持と防衛により . . . 教導の傭兵隊長 . . . その後者については長期に . . .

1 2 できない、欠いている、望んでいないこと、それに無能、それらは同じことである。 . . . あらゆるランクとタイプのジャーナリスト達と作家達、あらゆるランクとタイプの教師と調査員、法律家の大部分と幾ばくかの医師と教説者達、それらは自由契約または準職業的形態で諸サービスを提供する。報酬はそれが与える時とそれが与える満足によって、例外はあるが、平均すれば高くはない。 . . . 不適切なトレーニング . . . 議論の中の満たされない信条についての採用され難い諸力の配列 . . .

隣人愛と教育——それを良しとする立脚点がない。 . . . 教育は供給を意味する——あらゆるホワイトカラー的な仕事に対する要請 . . .

ブルジョワジーの意識構造(mentality)と制度及びそれによって形作られた管理機構。 . . . 自由は抑圧され得ないものであり、しかも根底に難癖を意味する、それは階級的状态と階級の利益によって強化される。 . . .

13 「知識人」は社会の様々な領域から参集する。お互いに相争いながら自分のものでない階級の前衛として闘う。・・・高等教育を受けたものが多く、自由業やジャーナリズムとは関係が深い。ペンや口による言葉の力が武器である。・・・言動の特徴として、①実際の事件には直接の責任はもたない、②実務的経験からの知識はない、③批判的態度は自分を認知させるためでもある。・・・

源流は古代ギリシャのソフィスト達、続いて中世の修道士の中にも、資本主義の誕生期にはヒューマニスト達——古典を解義し、そのテキストクリティックから社会批判に。・・・諸侯の庇護をうけたが批判精神は一面のおもねりなどと共に大となった。ブルジョワジーが大衆をつくり、富と安い書物の時代になると世論形成者となろうとする。・・・「ペンは剣よりも強し」という態度、ウィルケス(18世紀)はその典型。・・・資本主義はそのどんな抑圧にも失敗した。・・・オルレアンのルイ・フィリップの下、ストライキの教唆者としての彼等を警察が検挙しなかった。ブルジョワジーの私的要塞が彼等を庇護した。・・・それができたのはボルシェヴィキやファシスト政府であり、彼等に忠誠を誓わせることができた。

大新聞の時代、新聞の経営基盤はブルジョワジーにあったが、更にブルジョワ批判のために新聞と知識人の連携が生じた。・・・教育の拡大が資本主義文明の特徴——とりわけ高等教育、需要に合致しない修学者の急増、知識人は失業または標準以下の低位就業に追い込まれることが多いが、一般労働者に伍して働けない。資格だけは多くもつが満足な仕事の出来るものは1ダースに一人もない。自意識に対して劣る職場で不愉快・不満を大とする。その憤慨が資本主義秩序の道徳的否認となる。・・・道徳的否認はマルクス体系への帰依により、それを超えたものになる。・・・労働運動や労働者の政治活動には——知識人の指導を渴望したものではなかった、しかし群れをなし始めた知識人にとっては好機であった——進んでこれに容喙し、刺激し、言葉でその正当性を表現した理論とスローガンを与え、組織化を図らせた。・・・その急進化はプロレタリア革命を示唆する。・・・知識人ならざる指導者達、隔たり感、怒らせられる。・・・彼等は現実対処から労働者達を叱りつけ得るが、知識人はそれができない。阿諛と追従、陰からの煽動、不満気の少数派ラディカルへの肩入れ。・・・

知識人達の最大の収容先・・・行政や他の公共機関、とりわけ教育機関・・・もともと合理主義的・功利主義的文明、即ちブルジョワジーの所

産である公共部門の肥大の中にもぐりこむ・・・それにも拘わらず、諸政策が資本主義に敵対・・・敵対的雰囲気醸成・・・資本主義のエンジン活動の妨害・・・キャリアの下僚乃至は参謀として・・・政治家の秘書として・・・そしてブルジョワジーの子弟の教育に任じ、子弟に体制反逆の精神を植え付ける。

* 13は刊行本の第二部、第13章の二、「知識人の社会学」の抄出である。(編者がその必要性を認めて行い、ここにおいておく。)

14 敵対の雰囲気・・・

繰り返さない——不機嫌に・・・先に述べた結論・・・

礼儀正しく責める・・・「考慮の外におく。」・・・

私は本来このように拵げられるべきだとは主張してこなかった、ただ「イラスト化」のためにのみ・・・

暗示しておいた様々な異論・・・29-39(恐らくは原稿の頁)ではそれに対して何も言及していない、とすでに述べた。かくしてすでに論じられたものの回復・・・補完にある諸政策、3頁にすでに言及。しかし「大きな諸々の可能性」があるのでは?・・・早い時代・・・資本主義によって創出された。不平等のあるところ、現代の政治に対する心理にあるものと同じ。・・・

この態度、よく考えられ、そして予見している・・・信認された労働者は、社会心理に即して第II章ですでに、状態はさほどのことはない、即ち労働者の契約はそれほど悪くはない、ということを示した。

15 スタインベックは途方もなく教訓的である・・・そしてハウプトマンの織工達(Webers)に比してどれほどに全く異なるものであることか(いつこれらが発行されたのか、時期?)・・・

資本主義は知識人を生み出すのではなく、過剰に生み出す、それ自身のロジックによって。更に、このようにして、彼等に準階級的(quasi-class)ポジションを作り出すのである。・・・どこから来たものであるにせよ、

その下で各人は多かれ少なかれ、ある姿勢とある利益的結合を設けることになる。・・・いふなれば、ここでは全てのことを理解していると信じているが、さりとて活動領域がないか、または軽侮しているような仕事だけしか持たない！・・・知識人達と社会主義については尚、何事かが述べられなければならない。IIにおいてが最も良く(更にその場合Vにおいて)・・・資本主義は人心を掌握しない。・・・(?)・・・ヨーロッパ英国における代表制との比較・・・

安全についての興奮状態(hysteria of security)——知識人達だけ！・・・南部諸州にとっては民主主義の原則からは否定されるようなあり得ないことが決定された。・・・策略を売ること・・・規制することが甚だ困難である。・・・このことを見抜くこと、そして満足であること、されば時間がかかっても大きな損傷はない。・・・人々は嘘をつこうとは考えていない——、そして激情の中で単純に赤を求めようとする、のは事実である。・・・ボルシェヴィストの立場からすれば、それでしばしば充分なのであり、——単純に親ロシアに適した者として資することになる。・・・

体制の攻撃者はほとんどの場合社会主義者をよそおう、とは限らない。・・・

16 何と哀れなブルジョワジー！・・・君達は愚かな羊だ。・・・首吊り人を買収することを試みる——国内では労働者を買収し、国外ではロシアをなだめる。・・・そして政治家が、その傍らで、この豚の成果を追う狩猟を助ける。・・・

17 「小ブルジョワジーは気がふれてしまった。」・・・何事からの選抜？　そこからどんな種類の成功が生じるのか——与えられた社会的仕組みの中で社会的に重要なものであるような——。・・・独裁制は個性の役割が徹底している経済に適合する。・・・私は社会主義が来たるかどうかを示すため語ってきた。

18 興味ある問題・・・興味ある現象——資本主義の内部で上位階層は次のように供述している。・・・あからさまな親ソビエトとあからさまな親ロシアは多分大きなものではない。しかしそういう行動をとる人々が多数派である。・・・

どのように上位階層は生活しているのか。・・・イギリスは工業国である。・・・それ以上に農民層(Muschiks)がない、そしてそれ故に自由な公開性が欠けていることが興味を惹く。・・・完全雇用かそれとも自由か・・・賃金といったものと投資・・・政治的決断としてのみ・・・

生活スタイルにおける変化に何があるのか、それは動機付けと同様に非常に重要である。・・・労働者層の保護が必要なことははっきりと・・・保守層の諸動機・・・イギリスのもつ多くのハンディキャップの一つ、それに保守的な警察についての政策。・・・何故に課税よりも抑圧された状態の方がほのめかされるのか。・・・

19 資本主義と資本家の利益に向けられたかの敵意の雰囲気・・・どんな嘆きをもたらすであろうよりも一層多くの満足が得られる——悲嘆の事実的基礎は大体において、その上で生活している全ての人々に即して表そうとなされているほどには、強力ではない。たとえそれがそのように強力であったとしても、異議申立人(discontent)の上部構造を生み出すには、それ自体充分なものではない。しかし多くの物事は、多かれ少なかれ——階級の組織化された衝突に向けてあらゆる資本主義的企業に浴せられたものであるところの——質問票の洪水に由来して、そのようにそのそれぞれの説明を見出すのである。その中に現代の政治家達と諸政党の態度があり、現代の立法の精神があるということ。・・・

もし我々が諸個人や諸政党は階級的利害の表出者であるというのならば、我々は真理の一半を強調していることになる。他の一半が、一半以上のものではないとしてもそれだけの重要性をもつものとして、あるのである。政治はそれ自身の利害を放出する職業(Politics is a profession that evolves interests.)である——その利害は一個の人物乃至は一個の政党が「代表」しているグループのもつ利害と一致する場合と同様、衝突する場

合もある——ということを考慮するならば、他の一半も視野の中に入れてくる。すなわち、そうした個人並びに政党の意見は他のどのようなことにもまして、キャリアと名声に直接に影響する政治的事情内の要因——その要因とは一つの時代の道徳律であり、それがいくつかのグループの大義を高揚させ、他の大義を問題外とさせる——に対して敏感だということである。物事の資本主義的秩序に対して敵対的な雰囲気からは、それ故に、彼の出自であるブルジョワジーの陣営を重んじることを原理的に拒否するような敵対的立法が導かれることになる。

20 ほとんど普遍的な不承認となっていることはすでに述べた。・・・被覆しているものを剥ぎ取ることについてもすでに述べた。・・・後ろ向きに働く政策・・・遅くさせる・・・諸課税がとりわけ、それをそこで再度に強調を！・・・均衡利潤の中で・・・貯蓄・・・富の割合・・・二つの道徳的世界・・・政治はもはや資本家利益にもつばらではなかった——否、そうではなかった。・・・資本家そのものが自分達の立場に立っていなかった。・・・

敵対的雰囲気は現代の政治の支配的留意点を提供するものであり、現代立法の先験的事実(the apriori)なのである。・・・自ずと保守的なものは益々以て(これには二つの根拠が)・・・もはや退却戦(Zückzugsfichte)あるのみ・・・幕間1・・・

21 敵意の雰囲気を通して資本家の船は、幾ばくかの期間、航海を続けてきたのであり、しかも敵意の雰囲気を通して資本家の船はそれが武装解除となるまで前方へと航海し続けなければならないであろう。多くの事柄が、偉大なことであるか、些細なことであるかを問わず、この図式の中でそれらの説明を受ける。諸階級の組織だった衝突、そして階級闘争のローガンはその例である。あるいは資本主義の秩序に、あるいは何らかの特定の資本家の利益に都合が良いか、都合が良いように見えるような諸命題、それが品位を欠くとしてケチをつけてみられるという事実。あるいは資本主義に向かつての人々の態度の中にある革命が仕上げられていくこと。並びにある種の道徳律が法廷外で親資本家的態度を暗黙裡に叩くよう出現

してきていること。そうした流儀と、あるいはまた一層ユーモラスな論点を含むものとして、現代の設問の洪水が如何にその見取り図に適合しているかの提示。それらの全ては、しかし説明的材料の海に溺死することなしには、読者の前に納得のいくよう置かれ得ない程のものなのである。・・・我々は先に進まなければならないが、上記は敵意の雰囲気を扱う一個の理論の路線として、提案されるものである。

2 2 あらゆる渡り鳥の中で最も哀れなのが追随者の支持を願う歴史家である。・・・僧正は冷笑する、もし君が人の罪を抱え込むならば、他の人々もまた冷笑し、更に遂には冷笑の根拠を抱え込むと信じることになるだろう。・・・

解体・・・知識人の影響・・・二重に a) 労働者に及ぼすもの、b) 雇用主自身とそこからブルジョワ階級に及ぼすもの・・・婦人有権者連盟・・・

2 3

a) 最後に変化は資本家階層そのものに及ぶに至る。・・・動機の摩耗・・・行動の諸形態・・・

b) α 弛緩する機能の諸結果

・・・それでも管理と貯蓄の機能だけはある——しかし過大なものではない。・・・それは外側だけでなく、内側においても作用する・・・地位と新与件・・・雇われ経営者・・・

β 保護がなく怯えている(士気を失っている)・・・それは姿勢にも行動にも作用する。・・・生産的資産——そのために闘うべく支配している・・・それが生産的諸力の喪失と敵対の雰囲気によって蒸発させられる(とすでに述べた)。・・・そして敵対的諸勢力の成長がある。それに道を開けさえするし、ブルジョワ民主主義の手段(命令、禁止といったこと)でこれと闘うことができない。・・・攻撃の合法化・・・保護の喪失は国際的でもある。・・・それぞれのケースにおいて教育がなし得るダメージには限界がある。

- γ もてる意識構造と諸態度——それ自身半ばは変換されている。・・・諸理念(ideals)と諸動機(motives)と意志(will)と罪悪感(conviction)は崩れてしまう。・・・
- c) 最終は次のことを仕上げていく。
- α 家族と子供・・・婦人とマルサス主義・・・王朝、確実化・・・個人的安全
- β 受け継がれ、且つ投資された富の中での家・・・心労と危険の源泉、もはや榮譽ではない。そして下方への操舵・・・安価な商品の質がより良いので高価なものは必要としない、例えばホテルといったもの、そのように消費者資本を手軽なものにする。・・・理想は知られているのではない。・・・教説される、・・・フェミニズム、産業的機能・・・教育される・・・形式化を導く・・・大邸宅・・・
- d) だが社会主義に向けての関説は？・・・いつ、どのように？・・・方法は？・・・いまだそこまでは！——しかもこの問題は我々に纏いついてくる。・・・この設問には次から次へと答えられよう。・・・世界革命・・・現代の社会心理学的体質・・・

24 資本主義は資本家階層自身の態度と動機をそのままにはおかない。この階層の重要性を考慮する時、またそれが厳しい選抜淘汰過程の産物であり、更にその動機の構図とその体制の成果(performance)との密接な関係を考慮する時、この点は恐らくあらゆるもののうち最も重要なものなのである。資本家層の振る舞いは、どんな場合にあって、経済的、及び政治的環境の変化に対応する変化と結び付けられている、というのがその根拠である。たとえその動機、乃至は価値の構図が影響を受けること無く完全に維持される——もとよりそんなことはあり得ない——としても、このことはそうであるだろう。だがそれを再形成することに加えて、資本家過程は直接的に正にその中心部である家族と家庭を攻撃する。我々はその難破を検討する前に、反復の危険を冒してでも、以前の結論を今一度述べ、且つ発展させることが有効であろう。

我々は検討してきた。企業者機能がゆっくりと、だが休むことなく重要

性を失っていきつつあること、そしてこのことが如何に資本家階級に影響を及ぼすよう結び付けられているのかということ。管理的・経営的機能と貯蓄の機能はこれも同様に重要性を失う傾向にあるのだが、それがグループ(資本家家族)のため残されるであろう全ての機能である。それは、封建時代の戦士階級とは似ておらず、社会的リーダーシップの他のラインを——階級として——征服するという仕事に対して悪しく装備されている。物事のこの状態への適応は、しかも最大のスケールでの物事に対する、即ち官僚制化されたビジネス(bureaucratized business)に対する適応は、それ自身の内に、次のような様々なビヘイビアの型を生み出すのに十分なものがあるだろう。即ち俸給取り経営者のタイプにおいて、それに以前注意しておいたような株主の様々なタイプにおいて。そこから財産のもつ血の気のみなぎった諸権利——それはすでに消え去ってしまっている——に由来するビヘイビアの諸種において。自分のものを確保しようとする、そしてそのために闘おうとする、かの頑固な意思もまた消失しつつある。

嘗ての闘って確保しようとする意志は、その展望と意味を失うが故に消失する。子供達に残されることができないような個々の役職とか、管理に対する抽象的な請求権と高度に壊れ易い報酬を意味するような幾ばくかの株式とか、そうしたはかない物事のために最後の塹壕に拠って闘うことは無意味である。個人的立場からも、全体としての階級の立場からも、同様にそうである。このことは最も重要な帰結をもつ。資本家階級の典型的人士達の時間的視野(the temporal horizon)を縮小する。彼の先代達の大部分が古く行ったような無限の将来のため働くことを止めて、短期的立場から「彼の」企業で起こっている諸事件を見ようとする傾向がある。・ ・ ・無責任というのではない、他の利害調節を図らざるを得ないだけである。一層に専門家的な態度、但し尚未だ諸事例であって、過度には主張されずにおく必要がある。

25 とりわけ、一個の産業的、乃至は金融的王朝を築こうとするような壮大な野心は、たとえ一族の動機が混じり気なしに残されたとしても、それを充たすことの困難性——実行上の不可能性を考慮してのことではあるが——の故だけからしても、死に絶えなければならぬ。この困難性もとより先に分析した「無防備性」と「敵意」によって大きく増幅される。直接的には様々な相続税を通して、間接的にはその諸価値についての殆ど

普遍的ともいえる不承認がそのことを敏感に意識するような社会階層の間に拡がるという無気力を通して増幅される。帰結として、我々は次の観察を得る。産業階級のその敵の信徒(**the creed of its enemies**)へのあるゆっくりとした変換、に非常に似た何事かがある、と。かの階級は以前からの価値の構図に従って行動する機会を欠き、且つその諸利益を防衛する手段を欠くだけではない。そうした価値の構図そのものとその諸利益を防衛しようとする動機を麻痺させる傾向をもつのである。資本家の意志は妨害されているだけでなく去勢されている(**being devitalized**)のである。ブルジョワ階級は彼が欲しているものをもつことを得ないだけでなく、その欲することを止めようとする方向に向かう途上にもあるのである。

それはゆっくりと典型的にブルジョワ階級の諸規範の中にある真面目さを失わせ、そして——部分的にはそれとは知らず——彼等と両立し得ないような諸々の諸価値と諸スローガンを受け入れることになる。それはかくしてその敵によって教育されることをそれ自身容認し、更に息子達と若者一般の教育を敵に手渡すことにさえなる。たまにはいくらかの人々が自ら結集し、「奮い立つ」ことを試みる、ことは疑いない。しかしそうした試みと彼等が引き出す反響の双方の弱さは、私が伝えようとしているものを——通常の黙殺よりも——一層良く描き出す。観察者にとってそこでの抵抗が不可能だとは見られないような状況下においてさえ、何等かの保護的な工夫を結局においてブルジョワ階級から捩じりとってしまうことが、何故にかくも容易なのか、その理由がそれである。

・・・放棄の最大を伴った効果の最大、人材の輸入が爆発的移動の充分さを含んでいるとしても、・・・ラッセルとアインシュタイン・・・

26 如何様にこのことが金をつくることに対して、そして可能性に対応する政治的領域で闘うことに対して、動機に影響を及ぼさざるを得ないものであるかについては指摘するまでもないことである。こうした諸環境が与えられたとして、我々はいかなれば事業家の心的状態の中に発生している疑問を検討するに至ることを期待するであろう。「よろしい、結局のところ何故うるさく言うのか？」——経過の中で双方の意味するところのもの。

切り詰められた資本支出だけでなく、所得支出の為され方についても観察しよう。・・・もう一度、一層に安逸ではないスタイルと安価な代替物といったものがある。先行のページを・・・更に今一つ小生産者の仕事がある。・・・

しかしながら遥かに重要な作用は動機と態度に与えられるもので、以前述べたように家族の望ましいタイプについてのものである。・・・子供をつくらないことは資本主義の直接の作用である。・・・ゾンバルトの理論——義務は必要である、充足と成熟は明瞭には予見できないのであるから。・・・彼自身への、並びに他者への呪い。フェミニズム。・・・何故にイギリスの女権主義者達は・・・恐ろしいこと・・・ブルジョワ家庭の困難もまた原因の一つ。・・・フェミニズム、マルサス主義者に至る、切り離された個人・・・

27 金をつくろうとする動機をこのように再度考えるというのか？そして永遠の今として。・・・現代人・・・状況はかくの如くである、私はこの全部分を読み、それらが必要であり、また反復にならないかどうかを見究めなければならない。・・・

私は政治的問題(課税もまた)と反作用問題(Rückwirkungen)(中間的舞台について、並びに過激派の拒否について作用がもたらすもの)にも没頭しなければならない。・・・私は家庭についてのそれを十分にしなければならないし、且つその上に家族の解体について効果的に論じ、結末をつけなければならない。それは私流儀で——その全てを資本主義が作り出したのだからといった私の形で——進められる。・・・

それにしても社会主義はどのように？・・・その時と様式は・・・非常に長きに渡る・・・

28 生産だけでなく、且つ枠組みと社会的理念だけでない、私的生活についても・・・このことは二通りのやり方で作用する。a) 家族家庭——それは生活スタイルの形成センターであるのだが——を見ようとしてい

る者ならどんな者にも、合理的に、言ってみれば、自分にとってそれは目指すべき唯一のものではないとするような者ならどんな者にも、それは不合理なように見えるだろうこと、b) その故は資本主義が提供するものであるからであること。・・・

子供がないことは完全に前途を変える。・・・(?)・・・成功裡の人物はどこでも答えない。・・・他方の側に工場、他方の側に計算・・・子供のない家庭は悪いホテルでしかない、子供がないことは我が家(Heim)をも望ましくないものにする。・・・

29 子供のいないことに伴うものに注意せよ。・・・家族紐帯の解体がその上に基礎付けられるということだけではないし、階級的ポジションにおける保持の弱体化が家族紐帯の解体の上に基礎付けられるということだけではない。「義務の体系」の解体があるのである。・・・

30 人口の経済的効率のことは以前に出てきた。・・・しかし動機と価値付け過程の気分(Wertungsgangsstimmung)を経た上でのものは尚ここで。・・・

資本主義は多種多様なものを提供する。・・・資本主義は更に直接に道徳的取付けを崩壊させ、そうした技術を発展させる。・・・義務、信念を、そしてその場合、他人の諸信念をも、顔を赤らしめるような道徳的不誠実がその人の権利となすような。・・・兵役・・・

重大事とは言え、ブルジョワ的現象ではない。・・・社会的責任—個人的無責任・・・子供をもたないことに対する一つの根拠は、稼いだり、ビジネスに赴いたりする事への嫌悪もまたそうである。・・・家庭は適応されず、そしてそれは子供に向けて反作用する。・・・貨幣的要素—より大なる良き状態に即した、より大なる多産はないということ、家族を見出す貧しい時代(poor time to find a family)・・・

3 1 我々はここでも同様に心的挫折(Retardation)の根拠の一つを扱う。
・・・家庭と守護神(Penaten)は一緒になっている。・・・家族は際立って
中心的である。・・・委ねるべき息子達がない。・・・家族的動機・・・
妻と子供・・・王朝のため働くことが合理的でない。・・・私的生活の合
理化・・・Ⅲに対しては反復ではない、そこでは私は尚、仕事に向かう経
営者について語っていた。・・・家族は農民においては変わっていない。・・・
子供の少なきことは資本主義の合理性を経てもたらされる。・・・

3 2 今やそれはせいぜいのところ農民において、そうであるにとどまる。
・・・労働者と職人においてはそうでない——と言って問題はない。

家庭作業は見事に全方位的である(Homework fair allround.)。・・・

我々の意味での家族は——それを一門一統(clan)とおいても——同じで
ある。・・・充実した生活は変わる事少なき堅固な枠組みである。しか
もそれは妻達を堅固ならしめ、道徳的慣習と情操の標準と態度を創出する。
一夫一妻制の解体をなさないよう構成された家族と標準的な家・・・

工業はブルジョワジーの妻を奪う。しかし出生率が高い場合には職業へ
の参入は尚も進行する。ブルジョワジーの妻の仕事がない。・・・

悲劇的な指導者、アンバランス、アンバランスとなっている社会・・・
教育についての認識のなさ・・・強力な(?)のみが解明を可能とさせ
る適応の偉業。・・・

3 3 全ての態度におけるこうした諸変化——あるいはその背後にある
資本主義的進化の諸事実——は当然のことながらブルジョワジー家族に
影響を与えるだろう。とりわけ家族を構築することの責任のとり方に対す
るブルジョワジーの安直性に影響するだろう。*) 単純な原因対結果の
二者があるのではなく、この二者は相互作用にあると言った方がよい。典

型的にブルジョワジーの家族生活と結合したアンビシャスのいくつかは望ましいものでなくなる、あるいは実現することが一層困難となる、あるいはその双方が同様に直接的にそれに影響する——相当程度にはそれぞれ自身によりビジネスに向けて、及び生活へ向けての新しい諸態度を生み出すのに充分であるだろうところのやり方において——、といったことがもたらされるような社会的雰囲気を生み出すことにより、ブルジョワジー家族に影響を与えるところの同様の社会過程がある。二つのものの更に一層の重要性をもたせるのに充分なこの局面が、今や、我々の注意を召喚するのである。

*) この安直性にみられる諸相(**variations in this readiness**)は統計的な結婚比率の中には確実なものとしてはもとより提供されない。というのは、結婚なるものは多くの異なった社会学的パターンをカバーする社会学的概念なのであるから、結婚率が知覚し得るほどに増加するとしても、ブルジョワジー的家族生活の意識内容に意味付けられた充分な意味での結婚は、同じ時代に完全に消え去っているのである。

エコノミストは現実に極めて明白であるようなことを示さないのが常である。手付かずの資本主義の時代(**the times of intact capitalism**)のブルジョワ的世界の内部にみられた「家族と家族家庭の支配的重要性」ということについても、その由来を示していない。ブルジョワ的家族家庭——街での家と田舎での屋敷——は特徴的な図式を身につけており、生活の一つのスタイルを形成している。ブルジョワ家族が社会生活——その諸価値に対する関与の一般的要点と文明のもつその諸形態の象徴——を観察するのはその窓からである。彼等の行動についての核心的事実はそこにある。

家族動機(**the family motive**)は資本主義エンジンの駆動力である。古典派経済学者達がなしたように、我々が自己利益の概念を綿密に検討するならば、我々はすぐさま「そうするだろうと想定された事柄は、切り離された一個人の自己利益から期待されることができるよう事柄では、結局においてない」ということを明らかにする。古典派経済学者達が明らかにしたのは、家族の中に錨を下ろしているところが工場の中に錨を下ろしているところよりも少なくはないタイプの者であり、その心情は家族と工場の双方によって形作られるということである。第一の錨が第二の錨よりも本質的なものではない、とは少なくとも言えない。双方を一緒にしてのみ、彼等の振る舞いは描かれるのであり、とりわけその視野(**the horizon**)につ

いて、これらの経済学者は述べたのである。

そして家族動機は妻と子供達(複数)を含む。子供のない結婚生活は、とりわけ子供の排除を計画の一部とした結婚生活は、ブルジョワ的振る舞いの中のその個性的特徴をもたらすために十分なものがあるとは言えない。即ち無限の将来のために働く、長期に渡った計画のため意味をもつよう全てのことを講じる、貯蓄の慣習といった、等々の態度をもたらすものではなくなる。子供のない家族は実際に切り離された個々人の態度と本質的に異なる諸態度をもたらす。それはブルジョワ的外観を私的と公的の双方の生活において変える。長期の、そして階級——もとよりブルジョワ階級——のために闘おうとする意志、自分の存命中に受け取れると個々人が期待する所得そのものとは区別されるような所得の源泉の保全と改良のために闘おうとする意志、こうした意味をかくも効果的に萎縮させるものは、これをおいて他にはない。もとよりブルジョワジー心理の中に持ち込まれた他の要素もある。しかしそれにも拘わらず、彼等の子供達の経済的位置に対する責任という点でしばしば特徴的に異なった見方をする近代的両親にも、我々が観察している事実から推論されるように、独自の重要性はあるのである。他の事柄と同様に、それも資本家過程の産物である。

出生率の低下は子供をもたないとする故にだけでなく一人か二人の供をもつ程度に家族数を制限しようとする故にはもっと大である。これは家族の動機の何等かの弱体化を必ずしも示さない——反対に際立って強い家族動機の存在を示すものであり得よう。多産性の減衰はブルジョワ階級だけでなく全階級に対しても、多かれ少なかれその傾向の拡散がある。出生率——歴史的には再生産率——の低下は全面的に資本主義的進化の結果の一つとしての「生活上のあらゆる合理化」に帰属させられる。私的生活領域への合理化の拡散の結果の一つ以外の何物でもない。通常説明で展開される他の要素は容易にこのことに還元されよう。我々はここに家族の少数化の願望とその願望の成就せられる容易性を区別しようと思う。

所得と出生率の関係、経済学者達やこれを扱う他のタイプの研究者達は何かある得心はしていないかのやり方で取り扱っているかのようである。古典はマルサスの見解——人口は常に利用可能な生活維持要件(available sustenance)によって設定される限界にまで増加し尽くす傾向にあるという見解——を無批判に受け入れてきた。必要な前提を挿入することで、我々がこの命題を的外れなものにしてしまうか、またはそれを拒

否して馬鹿げたものの記念碑とするか、はこの際問題でない。事実問題として、生活水準の高度化が——アメリカ・ヨーロッパ領域とそれを欠いた他の幾ばくかの国々で——家族数を制限しようとする願望を危うくしている、ということよりも更に明瞭であるものはないのである。

幾人かが言っているのであるが、次のように言うのは恐らく全くもって満足のいく言い方ではないだろう。即ち実質所得における増加が——かかるものとして——そうした結果を生み出す、自動的にであるか、合理化といったやり方で、且つそれによって誘引された先見に応じて増大させられた諸機会といったやり方によって。これでは多分に異論に晒されるであろうが、我々は次のように言うことでこれを回避することができる。資本主義的進化はあらゆる階層部分(brackets)の実質所得を増大と私的生活の合理化を共にもたらす——前者の過程が後者の原因だとは必ずしも言えないが、それは常に相伴っているものではある——。この第一印象としてはとるに足らない修正のようにも見えるものの主たる利点は、かの作家達が保持しようとしていた所得における(長期の)増加と出生率との間の硬直的關係が引き裂かれ、——それにとって代わって——一個のもっと伸縮的な、多くの例外をも許容するような関係を得るところにある。我々の命題からは、経済条件の改良が多くの場合に——特に良化が親子世帯補助(the subsidizing parenthood)によってもたらされている場合には——出生率を高めると期待される、という見解があながち間違いだとは導きだせないのである。結婚したカップルにおいて、あるいはまもなく結婚を考慮している適齢に達した人々において。一方において「知識人」グループに属する若いカップルの振る舞いの観察が、他方においてファーマーやペザント達(子供は一つの補助金)のカップルの振る舞いの観察が、この点を確認している。マルサスの理論に支持を与えるものではなく、合理化の理論と完全に一致するものとみられてよい。

資本主義的進化は家族数の制限を招くような客観的動機と主観的願望をこのように創出する。同時にそうした願望を充たすことを一層容易にする。このことは二つの方法で行われる。最初にこの願望は非常に強い禁止を創出したであろうような宗教的及び道徳的な性質の伝統的情操を逆走させる。嘗てはこうした点で義務の確立された意味が存在したとなると、それは強力な社会的協定(social convention)として裁可された。しかしこうしたことは資本主義的合理性が埋め込んでいく傾向にある正にその種類の事柄である。それは真面目な事例を追い払っていく。それは自分勝手

(self-government of individuals)を妨げようとする試みを社会的に承認しないことを意味する。次いで第二に、資本主義的な独創性と事業精神は——もしマルサスの道徳的抑制よりも他に方法がないのならば——男に最強の衝動を非繁殖的願望の方向へと仕向けるであろう、益々以て性能の高い避妊具をもたらした。このことは非常に重要で「低落の唯一無二の原因」と名付けられた(ハロッドの素晴らしい論文を見よ)。ある意味ではその通りである。しかしそれは立ち返って問題の理論が提供する説明を求めることになる。

ブルジョワ階級とブルジョワ的生活スタイルに対する論議の傾向は、私が既に言及してきた諸要素——更にそのうちにブルジョワ諸層が関与させられてある限り考慮されて充分であろう諸要素——よりも他の要素が力説されるということである。資本主義過程は、諸方式の一亜種として、ブルジョワ家族に体现されてきた正にそのブルジョワ的生活スタイルを脅かすのである。

3 4 三つの追加的コメントが我々の行論を補充する。

第一にブルジョワ的生活の新しいスタイルは、今までのところコスト面での利益という点で決定的といえるものを何も提供していない、と私は述べてきた。しかしこれは私的生活の諸欲望に奉仕することについての経常コスト、乃至は主要コスト(**the current or prime cost**)にだけ触れたものである。オーバーヘッドコストに関しては、そこに純粋な金銭的利益さえもがあることはすでに明白である。生活におけるほとんどの耐久的要素に向けられた出費に関する限り、とりわけ先行の諸収入によりファイナンスされて用いられている家屋、絵画、家具類の一部においては、「消費者資本」の蓄積の必要性はその過程で思い切った切り下げがなされるといってよい。「消費者資本」に対する需要は現今において以前よりも相対的にも少であるというのではない。少額所得者や所得に中流の者に由来する耐久的消費財に対する需要は累増してきており、上記を相殺しているのである。しかし次のように言える。獲取せられてある諸動機のパターンの中にある快樂主義的成分(**the hedonist component**)が問題にされている限り、ある水準を超えた所得であることへの望ましさは、これまた引き下げられているのである。読者がこのことを了解するのに必要なことは完全に実務的な

精神に身をおいて、その状況を再構成してみることだけである。成功裡にある人物や夫婦、あるいは社交界にある人物や夫婦、彼等はホテル、客船、列車の中で最上のものを購入できるのである。個人的な消費と利用の諸対象のうち利用可能な最上の品質のものに支払うとしても、それがどんなものであれ自分達に合わせた程度においてもつ、ということであろう。そこでそうしたラインの上に組み立てられた予算が「先代」(senior)の生活のスタイルが要求するものよりも遥かに低位であるだろう、と見て取ることは容易である。・・・行論は具体性をもたすため定式化されたものではある。・・・今一つの動機がある。可能性として支配的な重要性をもつことは決してなかったろうが、どこまでも限度を超え自らを行使しようとするもので、加えて過度なまでに行こうとする。

これに加えて第二の局面がある。上層階級における消費支出の(相対的)削減である。私は以前、産業財産の具体的な形態の「蒸発」について長く考えてきた。眼で見、且つ手で触れ得る産業財産は先進諸国では農業の分野でのみ固執されてきた。ペザントやファーマーの保有は所有物と所有者が実物的にどういうものであるかを近代人に示すため残されている。しかし言葉の死活的意味での所有者、とってよいブルジョワジーのそのタイプは突如として死に絶えていきつつあるのである。それ自身では、このことは消費的財産とそれに結びついた振る舞いの型に影響するわけではない。だが影響があるのは、彼等が家族の家に行き、且つその中の内容物の諸部分が尚も——その近代人に対し——感じさせ、息吹を与え、闘わせ、造形させ得るよう残されている限りにおいてである。しかし我々は今や次のように見る。即ち、部分的には変わりのない風習のものであるとしても、消費的資産とそれを以てするブルジョワ的家庭所持者の心理構造は正に効果的に麻痺させられつつある。生産サイドにおけると同様に、生活もその本質を解体させられており、我々の意味での具体的な即物性の重要なある端の部分を磨滅させ、そしてその帰結として長期的視野を採ろうとする我々の習慣もなくさせられる、ということ。こうした結果を明らかにするには、独身者か、子供のないカップルかが必要とする全ての物の諸サービスを当用買いしている様相を思い浮かべるだけでよい。それは錨を失った空間にあるが如く浮かんでいるのであり、それ故に今や家庭と言えるものはどこにもないのである。

我々の分析の第三の帰結は恐らく他の如何なるものよりも重要である。ヨーロッパ諸人種に属する殆どの部族を網羅して今日の定住がなされて

いる諸国の設定の後、画一的となった制度の整備は、両性間の問題を完全に解決した。その制度的枠組みの中で、そして私的諸条件の下では、一方では出生率に対し、他方では自ら課している満足すべき分業に対し責めを負うような何の問題も発生しなかった、と言った方が良いのかも知れない。同じ図式が、いくらかの変異を以てではあるが、近代の入り口のところまで半ば農業的性格をもち続けた中世都市においても作動していた。家族的家庭が重要な生産センターであり、今日の産業が充たしている諸機能の大部分を充たしていたのである。これを運転することは育児に吸収されなかった婦人のエネルギーの全てを召喚する明確な招命(vocation)であった。今尚、ペザントとファーマーの分野でこの制度図式の残存があるが、そこでは「婦人問題」(Frauenfrage)なるものは存在しない。職人や小店主の世界にあってもある程度までそうである。しかし近代の産業プロレタリアートにあってはそうでない。工場の仕事は単純家事作業の補足であるが、この家事作業は——もし何の助力もなしになされなければならないとすれば——他のやり方であったら不満足ながらもあり得たであろう時間的隙間を残すことはほとんどありそうにない。それ故に我々はこの問題に向かつての社会主義者グループの典型的態度を完全に了解し得ることになろう。もっとも相対立した諸傾向や語句の諸迷路があるが。多くの社会主義者はもとよりブルジョワ過激派もその他の者もブルジョワ過激主義のイデオロギーの多くを社会主義の世界にもちこんだ。どんな場合でもそれは当然「女権主義」(feminist)となる傾向がある。たとえ、その状況が主張されているようなものではなかったとしても、資本主義に反対する一般的な場合への今一つの告発を付加するものであった。このように社会主義者はこの豊かな政治的支援の源泉を無視する余裕などはなかったが、それにも拘わらず平均的な社会主義の指導者や追随者達はいつも婦人問題の原因に熱狂的とは言えなかった。労働市場での婦人の何のとらわれもない競争が引き起こすに違いない明白な諸困難のせいだけによるものではない。また単純に、社会主義政党たるもの、そうしたブルジョワ的婦人運動には当然冷笑を以て位置付けねばならない、といったことによるとも言えない。それはこの問題が典型的にブルジョワ階層の問題であるという事実の知覚のせいである。

というのは、悲劇——我々がとかくそれを讃える習性をもっているこの時代の中で、多くの偽物とは区別せられた真正のもの——はブルジョワ階層の中だけにあるからである。産業的發展はブルジョワ階級の婦人達からその天職を奪い、そのように恰もそれが職分であったかの如く空洞

化させた。家庭での生産を洗濯と調理を除いては——この諸機能すらもが侵襲されていくこととなるのだが——何物をも残さない。その一方で同じ産業的発展によって創出された社会的諸条件と意識構造が共に、以前ならば育児に吸収されていた余剰エネルギーを増大させているのである。*)生活の空洞性、肉体的であると同様、感情的な衝撃による憐れむべき動揺、その最も悲劇的な場合は失業(仕事がないこと)である。適応的な反作用のため利用できる諸機会は——それが消滅する傾向をとっていないところでさえ——その問題の解決に成功しない。特に最上位にある社会階層には「社交生活」(“society life”)があり、そして彼等のためにプレイするという正にその目的のために創出された諸々の利点のためプレイされるといったゲームがある。あるのは絶望的な試みであり、真正の工夫であると共に痛ましいものである。ホームのイデオロギーのぼろきれにしがみつき、為すだけの価値があるとされる何事かの中へビンや鍋を残すことを褒めたたえる、といったことである。最後に職業の侵入と婦人の職業を創出しようとする努力がある。これはもとより望みのないものではない。しかし差当り、しかも長期に渡って、来るべく約束されるものは動揺と恥辱であり、男子に与えられるもっとも悪いチャンスの到達域内のそれよりも更に小であることを避け得ないようなチャンスを得る以外の何物でもない。これこそ豊かさの中の真の貧困(the true poverty in plenty)である。

* 私がかつて入手した 14 世紀の報告は、南ドイツの平均的な騎士の家族は「貧乏人の子だくさん」で暮らしていたことを指摘している。・・・ある城では、ゆうに 100 人以上の子供達と共に生活するところの 4 つの高貴な家族があった、と述べられている。・・・上層階層の担っていた古い時代の育児機能・・・

3 5 我々の主題にとっては、我々の制度的枠組み(institutional framework)の中の最も重要な部分の分解が何よりも象徴的である。しかし我々の社会的、政治的な状況の中には尚、重要な要素がある。

近代の過激主義を特徴づけるような平衡感覚と冷静さの欠如、現代政治の内政と外交双方におけるヒステリー、熟慮と冷静のように見える全てに対する嫌悪、長期的視野に立った事柄との関連での性急さ、国家と個人の神経衰弱的な落ち着きのなさ、これらの全ては——尚かなりの程度に全体

を言い尽くしているとは言えないのであるが——人類の最も文明化された階層の半分が明らかに精神と身体の病理学的状態にあること、及び自らを困難と抑制により解体させると同時に他の半分の解体する、という事態によっている。彼等の双方がその「擁護」(“make a stand”)の為に、ためらいなく最善を尽くす、逆にそうすることを更に効果的ならしめるために彼等が自己の運命の現実自身に自身を向けること、それをブルジョワジー社会は——その社会心理学的根底の如何なるものからも——与えはしないのである。それは全体文化に対して重要である。しかし、とりわけ資本主義的ブルジョワジーの抵抗力と機能のために。